
JAPAN

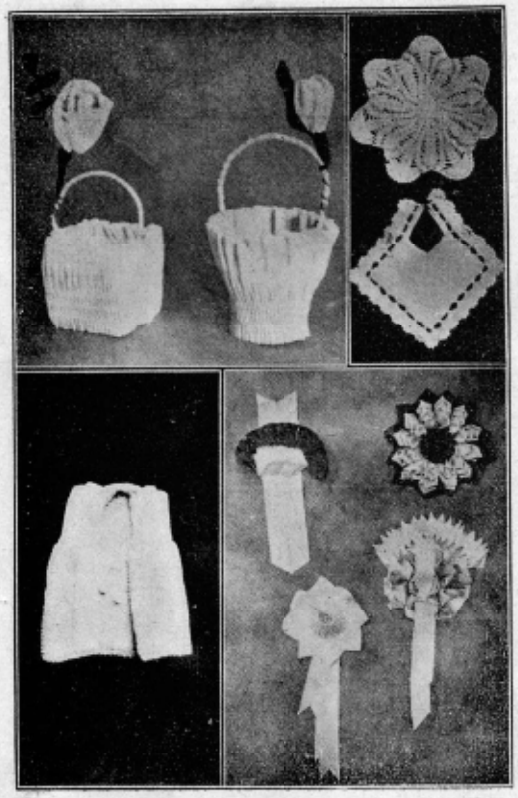
594
089-2

大妻高等女學校
技藝學校校長
大妻コタカ著

初歩の手藝

東京
忠誠堂藏版

物細とトーアンボリとーバーペブーレク

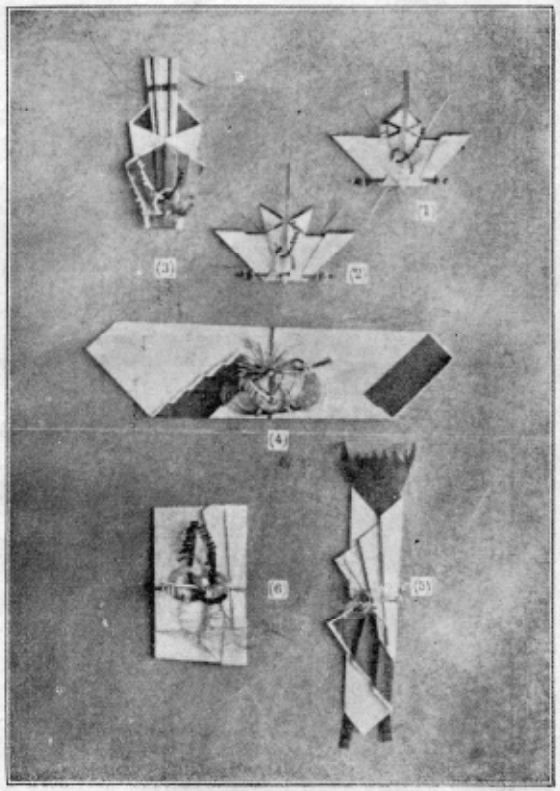


大妻学院
図書館

3419

東京都千代田区
昭和
3419
大妻学院図書館

製斗の折り方



(1)蝶蝶　(2)蝶蝶　(3)末廣包　(4)子生嬉包　(5)長製斗包　(6)結納金包

はしがき

高等小學校で手工科が正科になつてから、殊に女子の手工についてはいづれも苦心なさるやうであります。私達編輯部の方へも、屢々そうした御相談が舞ひ込みます。勿論、手藝全集とか、各手藝專門の出版も少くないやうでありますが、それ等は皆幾分專門的になつて居りますので、小學校生徒の手工敎授の資料としては高尙過ぎます且つ、各種手藝に亘つて資料を得やうとなさる場合には勞ひ、澤山の手藝書を集めねばなりませんので、隨分費用も嵩むことゝ存じます。それで、

第一、小學校生徒の手工敎材に適したもの

第二、一冊の本に各種の手藝が適當に網羅されたもの

第三、都會丈でなく、田舍に住む人達にも製作し得るもの

この三つの要求を具備する手藝書がなくてはならないと存じまして、過去一年間に、

大妻時報に載せました手藝の中から、適當に選び、更らに縫細工等あらたに報筆して編輯したのが、本書であります。

資料に苦しんでゐらるゝ小學校女教員方は、必ず、本書によつて、始めて久しく求めて居たものが見付つた喜びをお感じになることでせう。

又、一般のお方々は、本書によつて、あらゆる手藝の初歩が學ばれますので、至つて便利である上に、將來、一つの手藝を深く窮めて行かるゝに就いても、一般手藝に對する廣い趣味を養ふことが出來ますので、彼此相照して、思はぬ新手藝を發見さるゝことが出來るかも知れません。

どうか皆樣、この小冊子を手引として、手藝の國の美しさを窺ふよすがとして下さい。

昭和四年六月

著者識

初歩の手藝目次

一、人形細工……一
花嫁……一
オーケストラ……四
ダンサー……七
乙女……一〇
金太郎……一六
内雛……一八
おふとん人形……二一
リボン人形……二四

二、縫細工……三〇
菊花形針さし……三〇

うさぎ……三一
小犬……三五
桔梗型の肘突……三七
這ひ〳〵人形袋……四〇
うさぎ巾着……四三
三番叟爪袋……四六
菊形の肘突……五〇
手軽なお裁縫用具入……五三

三、綿細工……五五

提灯……五五
へうたん……五六
にはとり……五七

四、摘細工……五九

ハンジーの筆入……六四
ゼラニユームの小箱……六七
チユウリツプの筆立……七〇

五、リボンアート……七二

バラ飾……七二
帽子飾……七五
洋服飾……七八

六、クレープ造花……八〇

チユーリツプ……八三
コスモス……八四
ゼラニユーム……八六

七、編物……八八

赤ちやんの帽子……八八
五六歳用ケープと帽子……八九

五六歳用マーガレットオーバー……九二
赤ちやんの靴下……九四
足袋カバー……九六
靴下カバー……一〇〇
赤ちやん帽……一〇二
ハンカチ入……一〇六
レースの皿敷……一〇九
マクラメの電燈カバー……一一二
マクラメの鳥籠……一一六
リリーヤンの袋……一二〇
リリーヤンの手提……一二三
七八歳用セーター……一二六
羽織の紐……一二九
腕時計の紐……一三一
帯しめ……一三五

八、袋物……一三八
くり形名刺入……一三八
がま口……一四二
九、折紙と水引……一四七
金銀包……一四七
凶事用紙幣包……一五〇
吉事用紙幣包……一五三
合蝶……一五五
白酒の口飾……一六〇
胡麻鹽包……一六二
きなこ包……一六四
熨斗の折り方……一六六
花むすび……一六七
十、染色……一七〇

目次

幾何絞……一七〇
三角絞……一七一
麻の葉絞……一七三
實染……一七四
寫し染……一七六
押版染……一七九
芋版染……一七九
蓮版染……一八一
霧吹染……一八三
蔣繍染……一八五
金銀捺染……一九一
絞染……一九三

目次終

初歩の手藝

人形細工

大妻コタカ著

一、花嫁

材料

リリーヤン　着物用　一把
　　帶用　一把
　　髪用　少々
顔及手用　針金（二十一番）四七糎

拵へ方

髪　黒のリリーヤンを長さ二七糎程に十本切つて黒い紙に平らに糊で貼り附けます

この時少し糸をゆるみ加減にします。

帶（着物と配合よい色を撰びます。）これも前と同じ様に一九糎位の長さに十本を紙に貼ります。

體　四七糎の針金を一圖の様に曲げて、顔の部分に少し綿を入れて、顔のふくらみをつけて、上の方から白のリリーヤンできれいに巻きます。この時綿に糊をつけておいて、顔の恰好を見ながら、くづれない様によく注意して巻きます。顔の部分がすみましたら、つゞいて左右の手にも巻き手先のところは、手の平の様な形に、糸の崩れない様に糊をよくつけて、芯の針金が見えませぬ様に巻きます。

顔が出來ましたら髪を結びます、髪は高島田でも、丸まげでも好みの形に作ります。先きに貼りました黒いので、まげ、びん、前がみ、たぼ、と各々小さく切つて夫れぞれ形を作つて、これを順々に形よく貼りつけます。（顔の形によく釣合ひます様に氣をつけて貼ります。）







髪が出來ましたら襦絆の衿を、配合のよい色で一本づゝ後から廻して巻き、次に胸の部分にほんの少し綿を入れて、肩の恰好を作りながら着物の色のリリーヤンで襦絆の衿の次に一本づゝ並べて胸、肩の形を整へます。

次に身體の帶の下の部分にリリーヤンを少し足して帶を締めます所へくくりつけて、下の方は着物らしく見せますそして帶は前から見まして正しく巻きつけて、後のお太鼓は先きに貼つて有りますのを、好みの形に作つて背に貼りつけます。

袖、今度は袖を作ります、袖は腕の部分の先きに白のリリーヤンを巻いて有ります上に又綉をひいて、其れに貼りつけながら下を袖丈だけの輪にしまして、ぐる〳〵手くびまでまきます。（左右とも）

これで全部出來上りましたのですから、手の恰好、頸の恰好に幾分しなをつけて、嫁さんなり、娘さんなりの形を作つて、臺に惡の針金をさしますと、やさしいすらりとした、お人形さんが出來ます。

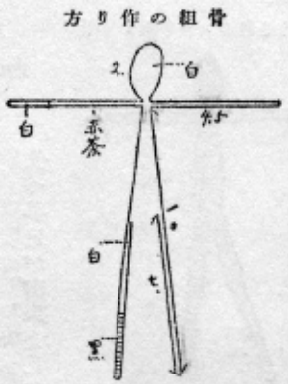
二、オーケストラ

材料

針金　五六糎（二十一番）
靴下　リリーヤン　黒　少々
胴　同　白　半把
帽子　同　青　少々
洋服　同　エンヂ　少々

拵へ方

先づ五六糎の針金を圖のやうに曲げます。



このオーケストラは足尖が現はれますから、針金を曲げて置きます。

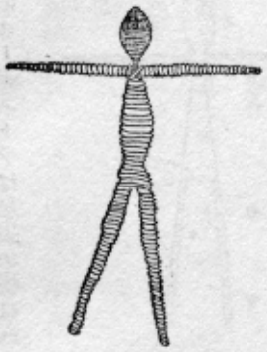
頭、顔の部分に綿を少々入れて、白のリリーヤンをきれいに一巻頸迄巻いて、頭の帽子の部分には、青のリリーヤンを二巻、三巻渦巻きにして、内側へ糊をつけて、頭の上部に附けてから、續いてぐる〳〵と額の邊まで巻いて一寸糊で留めて、糸の端を一糎程殘して切ります。

下地、白のリリーヤンで、手、足の先の針金の輪になつてゐる所に、糸を二巻、三巻巻きます。そして其れに續けて、ぐる〳〵巻きます。先から何れも巻き初めますから糸留めは、身體の胴の部分に巻いて留めます胴には綿を少し入れて太みをつけます。下地が出來ましたら靴下をはかせたり、洋服

を着せたりします。このオーグストラを拵へるときには、よく實物を觀察して、其の身體全體の太さの調子を製作の上に現はさなければなりませんから、リリーヤンの糸のゆるめ加減、しめ加減によつて、出來榮えに巧拙が出來ますから、簡單なやうでも、むづかしいです。

先づ手足が出來ましたら、手頸を一、五糎位白のリリーヤンの卷いた所を殘して、手先から卷きます、其時初めは細い方が宜しいですから、リリーヤンを少し解いたものを卷き初めに使ひますと、具合が宜しいです。肩迄卷きましたら、下前の右肩から左脇に三、四本卷いて、其れから左肩から右脇に二、三本卷いて、肩と胸の形を作ります、そして片方の手も同じやうに卷いて、手先を殘して留めます。

手足の先の卷き方



リリーヤンの卷き方

其れから肩の厚みが足りないときは更に其上に前と同じやうに卷いて、胸から胴、腹の部分も卷くのですが、手を卷きましたら、兩足にズボンをはかせて、其れから、胴を卷いた方が、作りやすいです。胴を卷くときに、腰の邊にやゝ太みを持たせて卷きます。

これで身體は全部出來上りましたから、各々、バイオリン、セロ、ギター等樣々の樂器を持たせて、其中の一人に鞭を持たせて、コンダクターとしますとなか〳〵暖やかな面白いものが出來ます。

三、ダンサー

材料

針金　四九糎

リリーヤン、赤、水色、黃、黑

絹布（スカート用）
糊氣のある薄絹



丈　一三糎
巾　一八糎
ビーズ
鳥の羽根、及び糸少々

身體の捲へ方

長さ三〇糎の針金を一本切つて、圖のやうな形に作つて、之を頭、胴、足とし殘りの針金で兩手とビーズの輪を作つて、胴と手をしつかり附けます。其れから顏に綿を入れて、ふくらみをつけ、其の上から木綿糸を卷いて大體頭の形を作ります。

リリーヤンの卷き方

頭の芯の綿の上に糊を引いて白のリリーヤンを一本並べにぐる〳〵卷きます。手は兩手とも先から顏と同じやうに丁寧に卷きます。卷き終りましたら胸の處でしつかりと止めて、糸の端を糊でとめます。但し右手はビーズを通す長さだけ殘して置きますそして兩足の先に糊をつけて、黒のリリーヤンを一糎位卷いて、又其れに續けて白のリリーヤンを足の長さだけ卷きます。片方も同樣にします。其れから赤のリリーヤンで肩と胴を卷くのですが、肩は手と同じ方向に三卷卷いて、其の糸を切らないで、すぐ胴を卷きます。胴は適當な太さを持たせなければなりません。腰迄卷きましたら、糸の終りに糊をつけて、胴の中に入れてとめます。

帽子は赤のリリーヤンを四糎位の長さの輪にして、眞中を結びます。そして其れに糊をつけて、凡そ一糎位の長さだけ頭を卷いて、最後の一卷を黄のリリーヤンを用ひます。

之で身體は全部出來上りましたから、右手にビーズを通し、左手に羽根を持たせます。其れからスカートを捧へて、はかせます。

スカートは黄色の摘み絹の糊氣のある布を丈一三糎、巾一九糎に切つて、丈を二つに折つて、圖のやうに裁ちます。

そして眞中を縫つて、胸に結びます。これで全部出來上りましたから、表情を充分現はすやうなスタイルを作ります。

四、乙女



リリーヤン人形には髪の結ひ方毛髪の材料など色々ありまして、隨分變つた人形が出來ますが、スピーンを使ひますと艶のある毛髪の感じが大層よく現はれます。殊に日本髪に結ひますと一層よくうつりますから、スピーンで前割の髪を結つた娘を作ります。

材料

リリーヤン　着物
顔
スピーン　黒　毛髪
赤鹿の子　帶
半衿

捧へ方

一、胴の作り方

廿二番の針金を寸法通り圖のやうに折り曲げまして全體に白のリリーヤンを巻きます。

二、髪の結び方

1、桃割の輪の作り方

スピーンを鉛筆か、小指に順序よくねぢれないやうにきれいに重ねて（巾は一糎位に廣げて）凡そ二十五回位巻いて、これを指からはづしません中に、別に黒い木綿糸を通じた針の針穴の方から通しまして、スピーンをしつかり結へます。これを二ケ所いたしますと一圓の様な桃割の片方の輪が出來ますから、もう一方も同じやうに作ります。そして之を二つ眞中で合せて又別糸で結へますと輪が出來上ります。

この輪の中へ根掛として赤のリリーヤンの解きほごしたのを一ぱいに通して目立たないやうに止めておきます。

2、びんの作り方

人差指と中指の二本へ（指に限つたことはありませんが大低二本の太さ位で丁度よい様です）スピーンを二十五回乃至三十回位巻いて、眞中を四圓のやうに別糸で締めて、指からはづしますと五圓のやうに兩びんが出來るのであります。

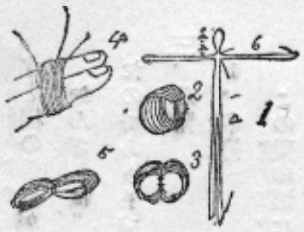
3、前髪とたぼの作り方

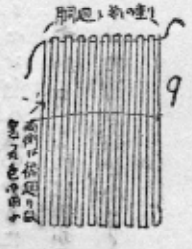
矢張びんと同じやうに二本の指に二十回ほど巻きまして六圓のやうに三ケ所を括ります。

以上で各部が出來ましたのですから頭につけます。

先づ頭にたぼと前髪を、黒糸で綴ぢつけ、其の間へびんを七圓のやうに挟みまして、又糸で綴ぢつけます

其れから桃割の輪を眞中へのせ、上下に針を通してしつかりと綴ぢ附けます。







4、櫛とかんざし

櫛は赤と白のリリーヤンを八圓のやうに小さな輪を花のやうに作りながら縫ひますと櫻の恰好が出來ますから、これに糊をつけて前髪と輪の間に押し込みます。

かんざしはリリーヤンの解き糸を小さく丸めて櫛の横へ糊でつければ全部が出來たのであります。

三、着附

1、半衿

この髪の娘には赤の鹿の子が似合ふかと思ひまして其れを使ひました。

2、着物

紫地にピンクの縞を表すか青磁に赤の縞を出したのも面白いかと思ひます。

適當な色を選びまして胸の邊にさせ、下の方は九圓のやうに帶下の丈だけに、縞目を作りながら、上部を針で縫つておきます。

右のやうに出來ましたものを胴に、着物の着せ方のやうに着せ帶の下になるところをしつかりと巻いて其れから帶を締めます。

3、帶

帶は前の方から胴體に巻きつけ、後でかゞつて止めておきまして、帶上と帶締をいたします。

お太鼓は別に、結び上げた形を拵へておきまして、其れを背につけるのであります。

4、袖

腕に綿を充分つけておきまして、其れから下へぐる〳〵と巻いていけばよいのであります。左右同樣に袖が着きましたら臺の上に取り附け、體の恰好を作りましたらすつかり出來上ります。

五、金太郎

材料

大豆　四ケ
腹掛用小布　緋縮緬
銀紙、針金、リリーヤン黒、ボール紙、千代紙少々

拵へ方

豆の形のよいものを四個撰んで、先づ豆の芽をよく切れる小刀で皮に傷のつかぬ様に切ります。（第一圖）

次に芽の所にパンジヤク糊を附けて圖のやうに四個の豆で、頭、胴、足を作ります。

身體が出來上りましたら腹掛を裁つて、中央に金太郎の金の字を一字黒で書き、腹掛の顎の處と胴の處との二個所に黒のリリーヤンかテープを糊で附けて、紐として顎の後と、お腹の處の後で結びます。其れから針金を一糎五粍位の長さに切つて、胴の手の出る位置に錐で靜かに穴を明けて、其處に先に切つた針金に糊をつけて、さし込んで手の形を作ります。手は右手にマサカリを持たせるのですから、右手は少し上に上げます。

出來上り



第一圖



第二圖



マサカリは葉書を其の形に切つて、其れに銀紙を貼ります。そしてマサカリの凡そ五分の一の長さの處迄墨で染めますと、マサカリの齒の處だけ銀になるやうになります。

其れから二つに折つて糊をつけて合せます。マサカリの柄は二糎五粍の長さに針金が、水引を用ひて、右肩にかつがせます。

次にボール紙を長さ三糎五粍、巾三糎に切つて其れに適當の模様の千代紙か、布を貼つて、兩端を五粍位づゝ折り曲げて、臺の厚みといたします。そしてこの臺の上に

金太郎を座らせます。

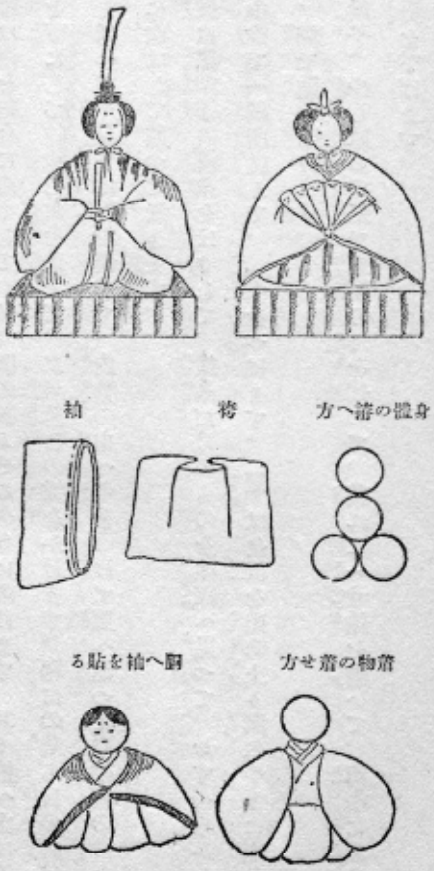
以上で出來上りましたから、顏を書いて、髮の毛を書きますと出來上ります。髮は黑縮子か何かを斷髮の形に切つて、其れを頭に貼り附ければ宜しいのであります。

六、內裏雛

材料

大豆　八ケ
袖用布　時色、赤、オリーブ、白等の縮緬二糎巾一五糎位
袴用布　赤、紫の羽二重、二糎巾四糎位
金紙　少々
冠用布　黑の細いリボン少々

拵へ方（女雛）



粒の揃つた四ケの豆の芽を切つて、頭、胴、膝と順々にパンジヤク紐で附けます。

そしてから先づ襦袢の衿を附けるのですが、脊が圓くなつてゐますから、後ろに切り込みを入れませんと、着せにくいですから、二個所鋏を入れて、圖のやうに着せます

袴は左右に二つ襞を取つて、胴の部分へ糊で附けて、下の方は折り曲げて膝の下へ貼り附けます。

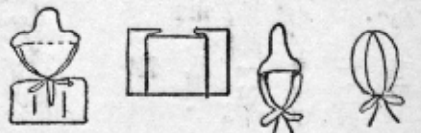
袖は幅を割合に廣くして、後身頃迄被ぶせるやうに附けます。其の褄へ方は下着の袖を下にして、少し袖を出して、二目落しの襞をかけます。袖口の裁ち目の時は端を少し折つて、袖下は糊で留めて、内袖の山へ糊をつけて胴へ貼つて、袖幅の餘りは後ろに廻はして貼つて置きます。

髪は黒繻子の横糸をほぐして、縦糸だけのものを生際へ貼つて、おすべらかしの様に中途で一個所結んで、冠をつけます。冠は金紙を出來上り圖のやうに形を切つて、糊で貼り附けます。

扇子、少し厚めの紙で扇子の形を切つて、其れに一寸繪を書いて、兩横に赤の絹糸で房を下げます。

これで出來上りましたから、左右の袖を合はせて、扇子を持たせて、臺の上に座らせます。臺は繪具でしま臺のやうにしますと、見榮がします。

冠の紐（イ）　冠（ロ）　着物（胸）　着物の着せ方



褄へ方（男雛）

身體の褄へ方は女雛と同じであります。頭には冠をつけます

冠は葉書を黒く染めて、圖のやうな形に切つたものを頭に貼りつけます。そして赤の絹糸の撚つたものを（イ）圖の様に顔に貼りつけて、顎の下で引き返へしに結びます。

着物の袖は女雛と少しも變りません。胴は襦袢の衿を見せないで、圖のやうに袖と同じ布を被んで、顎の下から貼りつけて袴をはかせ、袖をつけることは、女雛と同じです。女雛の扇子の代りに男雛には笏を持たせます。

七、おふとん人形

みめ形のうるはしい土の人形や蠟細工の人形をいたづら盛りの子供に持たせるのはむごたらしい氣がいたします。投げても、打つても損じないで、子供が負ふたり、抱いたりし易いおふとん人形は小さい子供にも容易に製作することが出來る簡單なものであります。



材料

大巾三八糎、メンリンス又はナフトル（お布團にする布）
青梅綿一包
顏布、キヤラコ三〇糎四角
帽子　一〇糎巾で頭廻りに縫代を加へたもの
其他、毛髮、ネクタイ用布

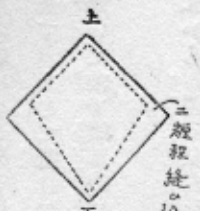
拵へ方

1、布團　大巾三八糎の布を普通の布團の樣にぐるりを縫つて綿を入れて、口を紲けつけておきます。但し正四角でなしに圖のやうに少し上の方の二邊を縫ひ込みます

2、頭　綿を丸めまして普通の毬を作るやうに絲を少し卷いて綿をおちつかせ、其の上に平らに一枚綿をかぶせて、其れからキヤラコの布をかぶせて下をくくりますこの時なる可く皺を後ろの方へやる樣にくくります。尙この上に白絹か白ピロードを顏の面の方だけへかぶせますと、一層感じがよくなります。これだけ出來ましたら兩耳にあたる邊に少しづゝ毛髮をつけまして、帽子をかぶせます。毛髮は黑の極細か、栗色毛糸がよいと思ひます。

帽子は好みの形で宜しいですが、後ろを頸の邊まで被せて頭の後ろをみんな見えない樣にいたします。

3、頭が出來ましたら胴になる布團を附けます。上の角の部分を中へ曲げ込んだだけでも充分つきますが、具



合の悪い時は少し角を切つて中へ頭のくくつた所を入れて胴の布と頭の布とをかがり附けます。そして附けた部分が見苦しうございますから、ネクタイとして別布を後ろから巻いて前で蝶形或は何か適當な形に恰好よく結ぶか又は、涎掛をさせてもよいです。

其れから布團の左右を着物の前を合はせると同樣に止めて置きます。

これで全部が出來上つたのですから、目、鼻、口を書きます。尤も頭を作る先きに之等は刺繍すれば尙よいと思ひます。

八、リボン人形

材料

三吋幅赤リボン　十四糎　服
四分の一吋巾白リボン　十二糎　手足
一吋巾時色リボン　五糎　帽
其の他　顏布（白絹）　毛髮（黒極細）

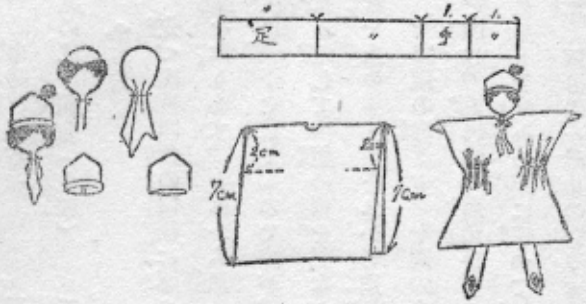
拵へ方

頭　先づ四糎四角の白絹に厚さ五粍位に綿を入れまして、圖のやうにくゝつてひらたい顏を作ります。それから黒の極細で髮の形を整へて顏の面の方へ附けます。

今度は帽子を被せるのですが、帽子は時色リボンを圖のやうに、一方の端を五粍程表へ折り返して、顏の形を見ながら前から後へまはし、上の兩隅をも後へ折つてチヨツト針で止めます。それから別色の毛糸か、リリーヤンの解糸で飾をつけます。

服　十四糎の赤リボンを圖のやうに丈を二つ折りし、袷肩明に頸の入るだけの小さい穴を明け、其れから肩山から二糎下つた兩脇を巾の三分の一だけ縫ひ縮めます。次にポケットを好みの形に切つて貼りつけてもおもしろうございます。

手足　四分の一吋巾の白リボンを圖のやうに切りまして、手は一糎位見えるやうに



足は四糎位出して、目立たぬ程の小針でとめておいて、足尖は靴をはきました形に茶色か黒で圖のやうに書きます。

其れから頭を肩明に入れてよくとめ、頸のまはりにビーズかテープでネクタイをつけると出來上りです。

九、リボン人形

材料

水色リボン	一吋巾　三六糎
白色リボン	四分ノ一吋　一〇糎
時色リボン	一吋巾　五糎

テープ　四〇糎
白絹、黒極細、少々

拵へ方

裁ち方

圖の樣に各リボンを裁ち切ります。

頭

先づ四角に裁ちました白絹で顔を作り、黒の極細で洋髪の形に附けます。別の黒糸で成る可く目立たないやうに止めていきます。

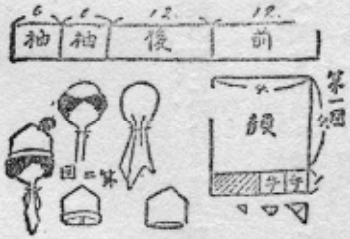
帽子は時色のリボンを圖のやうに折りまげて前から後へ被せ兩隅を後に折つて後頭部で一寸止めておき、飾を別色の毛糸か何かでつければよろしいのです。

服

圖のやうに裁つてある水色リボンの、袖切の袖口を表に八粍程折り返し、顔布から

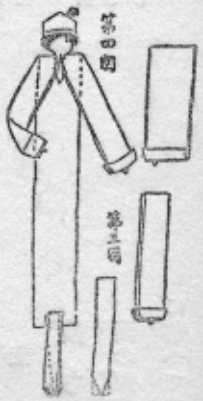
取りました白の一糎四角の切を圖のやうに小さく三角に折り疊んで手に見せて袖口から一寸出して止め、袖布を二つ折りにします。





足

白リボンを圖のやうに裁ちまして、靴をはきました形に茶か黒で畫きます。



以上出來ましたら圖のやうに後身頃を下において、其の上に兩袖、頭、足をのせ、其の上に更に前身頃を重ねて頭の所を縫ひ縮めます。足も小さな針目に留めます。

これだけが出來ましたら赤のテープ二十糎でパンドを締め、クリームのテープ二十糎でネクタイをし、別なテープ或はリリーヤンの解き糸でショールをしましたら出來上ります。

縫細工

一、菊花形針さし

菊花形針さし



材料

針山の布（縮緬又は薄絹）裏用布少々
絛のリボン（針山と配色よいもの）巾四糎丈八〇糎
葉　オリーブ又は鶸、色厚紙、綿、金糸少々、生半紙

裁ち方

葉の原型より縫代だけ大きく、生半紙を六枚裁つて布に貼つて裁ちます。針山は厚紙で芯形を二枚と、裏、表各の布で、七糎五粍の直經で丸形をも裁ちます。

妻大圖

菊花形針さし原型







縫ひ方

1、芯形の上に綿をのせて廻りを縫ひ縮めて、一枚の裏の心紙に裏布で綿を入れずに縫ひ縮めて置きます。

2、リボンを圖のやうに、八糎づゝはなして、山形に一本の糸で縫ひ縮めて、先に作つた針山の廻りに綴ぢて、兩端を手際よく縫ひ合はせます。

二、うさぎ

子供の喜ぶお耳の長い兎です。

材料

白ネル　並巾二〇糎

時色小布　（耳の裏）
綿　少々
生半紙　一枚

材料は白ネルでも宜しいのですが、縮緬を使へば手際も體裁もよく出來ます。

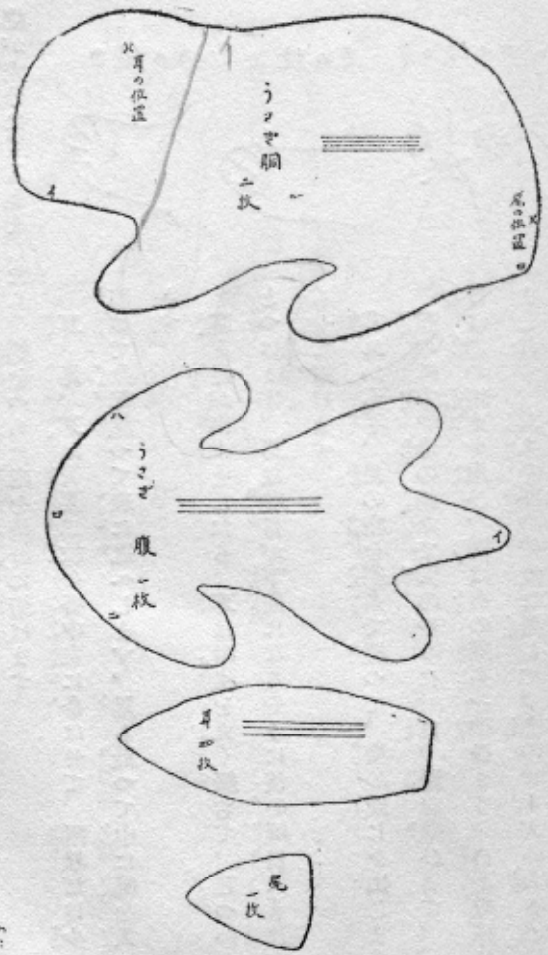


裁ち方

型紙通りに胴を二枚と、尾一枚、腹一枚、お耳を表布で二枚、裏布で二枚の型を生半紙で取つて、其れにふち糊をつけて布に貼つて、裁ちます。

縫ひ方

胴、胴の型紙二枚を合はせて、(イ)から(ロ)迄を即ち脊になる部分を縫つて縫目を割つて、腹の型紙の(イ)(ロ)の標を胴の型紙の(イ)(ロ)に合はせて、手、



足の型を拵へます。其時腹の(ハ)(ニ)の間は縫ひ殘して其處から綿を入れます。綿は

ピンセットのやうなもので、手、足の先迄よくはいるやうにしなければなりません。綿が充分に這入りましたら、綿をつめた處を細針に絎けます。


手の縫方


足の縫方


口の縫方

耳、尾、耳は表裏二枚を各中表に合はせて、附根だけ少し明けて全部縫つて表に返へします。尾も縫つて中に綿を入れます。

耳と尾が出來ましたら、耳は附根を丸く綴ぢて、しつかりとつけます。尾は縫目が下向になるやうに後の縫目にまたがらせて附けます。

其れから手、足の指を絹糸で縫つて、指の感じを出します

顔の縫方、赤の絹糸で圖のやうに、口、髯を縫ひます。口は赤の絹糸を用ひ、髯は白の絹糸を使ひます。口が縫はれましたら、其糸を眼の位置に通して、赤のビーズの大きいのを眼玉にします。

三、小犬

材料

白ネル並巾　二〇糎
赤縮緬巾三糎　丈二〇糎


小犬

綿

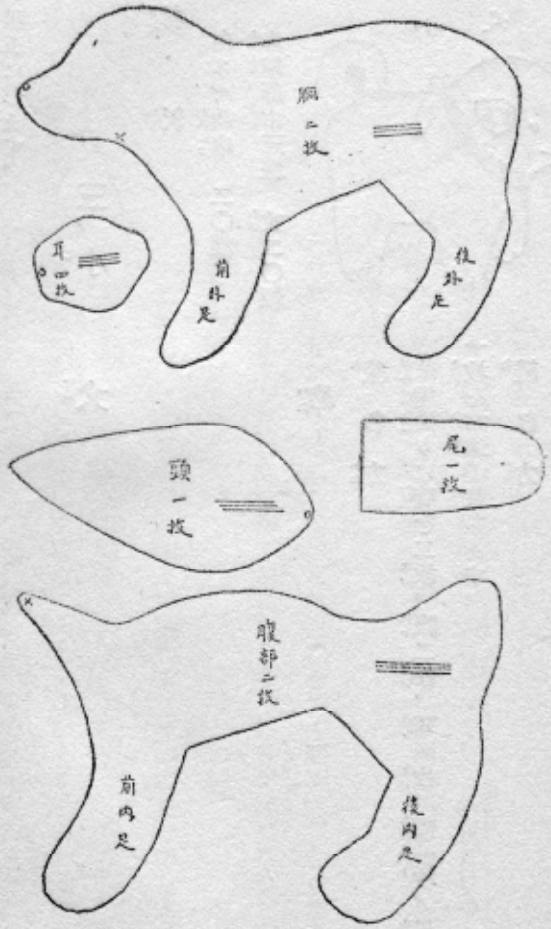
裁ち方

原型通りに胸を二枚、腹二枚、耳四枚、頭一枚、尾一枚を布地で裁ちます。

縫ひ方

1、腹部の布を二枚合はせて、（×標も合はせ）申程

を四糎位だけ明けて其殘りを縫つてから、前後内外の足を合はせて縫ひます。次に頭



の布を○標の位置に入れて、背縫も綴けて縫ひます。全部縫ひ終りましたら、四肢と胴によく綿を入れて、腹部の縫ひ殘した處をまつりつけます。

2、耳の表裏を合はせて○標の處を縫ひ殘して、其處から返して、先に少し綿を入れて、耳を頭にまつります。

3、次に尾を縫つて適當な位置に附けます。

4、頸卷は兩端にだけ少し綿を入れます。

5、次に眼玉と鼻、口を圖のやうに、縫ひます。



四、桔梗型の肘突

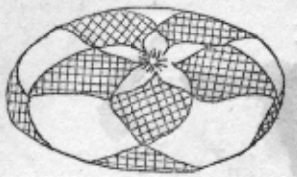
作り方は簡單で、一寸見ばえのする肘突であります。

材　料

紫縮緬　並巾一九糎

白縮緬　並巾一九糎
黄絹糸　一把
綿　ふとん綿一枚

桔梗形肘突出來上り圖



型の裁ち方

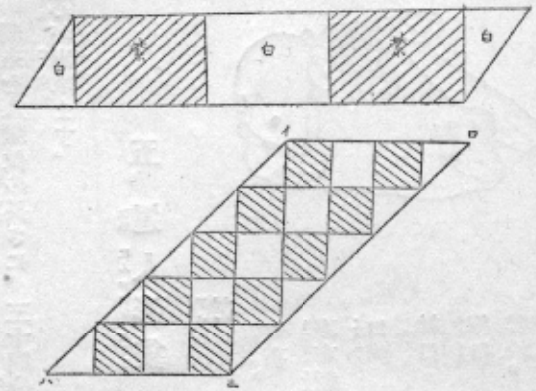
紫と白の縮緬各を八糎四角のものを十枚とつて、其のうち白縮緬の五枚分丈を三角のものとしますと、白縮緬の三角が十枚出來る譯になります。

裁ひ方

第一圖のやうに、白を眞中に左右に紫を一枚づゝ、又其左右の端に白の三角のものを一枚づゝ、出來るだけ細針で接ぎ合はせます。そしてこれと同じ接ぎ合せ方のものを五枚拵へます。

次に其五枚を更に第二圖のやうに、紫と白とが互ひ違ひになるやうによく縫目をきちんと合はせて、全部接いでしまひます。

布の接ぎ合せ方一（上）　布の接ぎ合せ方二（下）



次に（イ）と（ハ）を、（ロ）と（ニ）を接ぎますと、輪が出來ます。

次に絹糸を二本にして、第二圖の○標の處即ち縫目と四角の布の中央とを抄つて縫目を內側にして糸をしつかりと結びますと、綿を入れるやうになります。

綿は最初に凡そ肘突の三倍の高さに型を作つて置いて其れを、今出來たものに入れて、前と同樣にとぢます。そして綴糸の終りは、反對の側に出して、桔梗の芯になるところを表裏續いて置いて、表裏の花の芯

に黄の絹糸を八糎位の長さに、三十四位かけて、其れを附けて、後で輪を切りますと花の芯が出來ます。

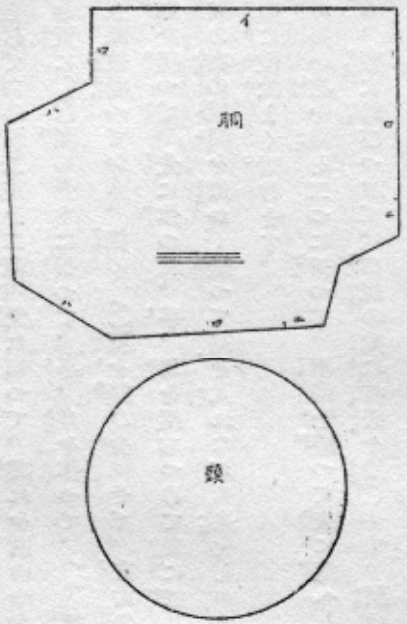
五、這人形袋

這人形袋

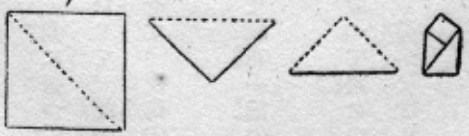


材料

表布（縮緬か羽二重）胴の型紙二枚分
裏布新モス（表と同寸）二枚
口絲　巾三糎　丈八糎五糎
袖口　巾一糎　丈四糎
裾口　巾一糎　丈四糎五糎
紐掛　巾四糎　丈一一糎五糎
紐掛紐　巾一糎五糎　丈一八糎



手足の布の畳み方



袖口と裾口の布を縦に二つに折つて、胴の表に當て、(イ)の處に口緣を四つ縫にして附けます。

そして白の羽二重を二糎四角に切つて、其れを圖のやうに、二度三角に折つて、其れを更に(チ)圖のやうに折つて、手、足を作つて、(ニ)標の處を合はせて、端から一糎五粍位縫つてから、裾の(ハ)標を縫ひ合はせて、左右の胴を合はせて、腹部の(ロ)の部を縫つて、先に作つた、手、足を綴ぢつけて表に返します。

頭の布の周圍を細かく縫つて綿を入れながら糸をしめます。そして胴布の前の縫目の處に位置よく附けます。

涎掛の布を縦を二つに折つて、兩端を縫つて表に返へして、襞を取つて紐をつけてから、頭に結びつけて、口緣の處に打紐を通します、顏は可愛らしく描かなければなりません。

六、うさぎ形巾着

お耳の長いうさぎを巾着の表につけた、愛らしいもので、拵へ方も極簡單です。

材料

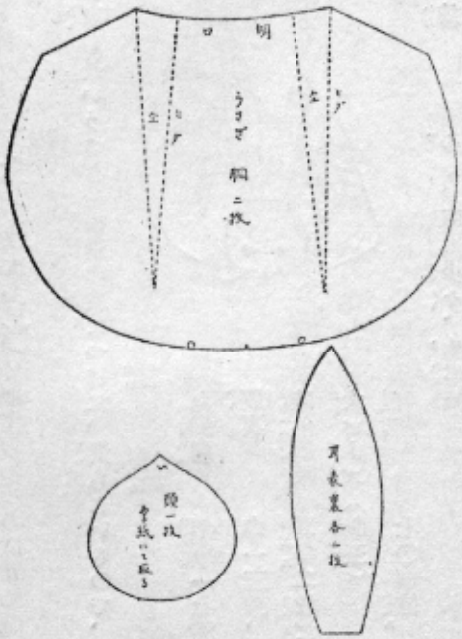
白縮緬　半巾一七糎（表布）
胴裏　巾一三糎、丈一〇糎
時色縮緬　耳型二枚だけ
大ビーズ（眼玉）　七〇糎位
打紐



綿　少々、厚紙少々、生半紙
絣縮緬　一糎五粍四角（眼玉）

裁ち方

胴型二枚、耳型四枚を生半紙で裁つて、表布に貼つて裁ちます。耳裏は二枚だけ時色の布で取ります。頭の型は厚紙で裁ちます。



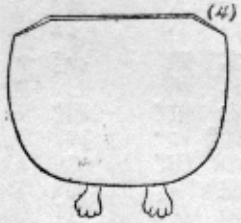
縫ひ方

1、(1)圖の寸法に裁つたものの角を丸く縫つて表に返して綿を少し入れて、指先を絹糸で縫つて、(2)圖のやうに作ります。

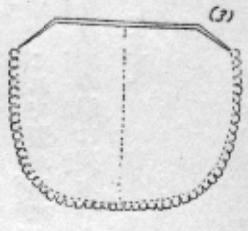
2、胴の型紙に襞の折り筋をつけて、表裏の胴型を合はせて、口明を縫ひます、そして表になる方の胴型の○標の位置に前足をはさんで胴の廻りを四つ縫にして、縫代に切り込みを入れて表に返へします。但し裏の底の部分を少し縫ひ



一圖前足の縫ひ方　二圖前足の出來上り



四圖胴に足を附けて表に返へした圖



三圖胴の縫ひ代に切り込みを入れる



五圖耳を二枚重ねて縫ふ



六圖頭の作り方

殘して其處から返へして、後で綴けて置きます。

3、表、裏の耳型を合はせて、附根の處を少し明けて其處から表に返へして、中央に一本筋を篦でつけます。

4、頭の厚紙に少し綿を載せて布で包み、四耗位に間隔を置いて、耳を頭に貼り附けます。そして眼玉は緋縮緬に綿を入れて、其れを頭の眼の位置に穴をあけて附けます。口鼻は赤の糸で(6)圖のやうに縫ひます。これで頭が出來上りましたから、絹糸で髯をつけて、鼻の處を兩手の中央に、其先は胴の端に列ぶやうに胴にまつります。

5、標の通りに襞を取つて、打紐を通します。

七、三番叟　爪袋

僅かの小布で一寸面白みのある爪袋であります。

材料

胴表用布と口布　緋縮緬　丈二〇糎　巾一〇糎

裏用布　表胴用布と同寸

袖　白縮緬丈一六糎　巾一

一糎

帽子　黒繻子丈五糎五耗　巾

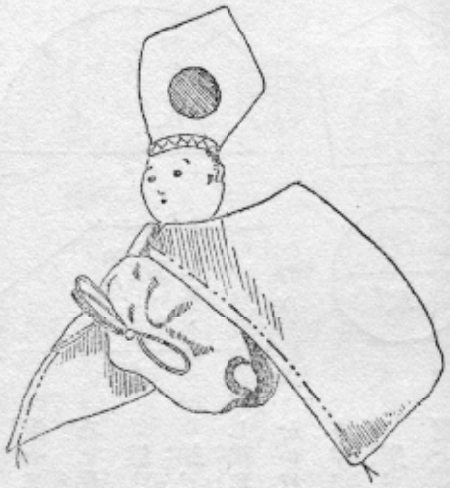
一〇糎

顔用布　白羽二重少々

其他、綿、口紅（六〇糎）生半紙少々

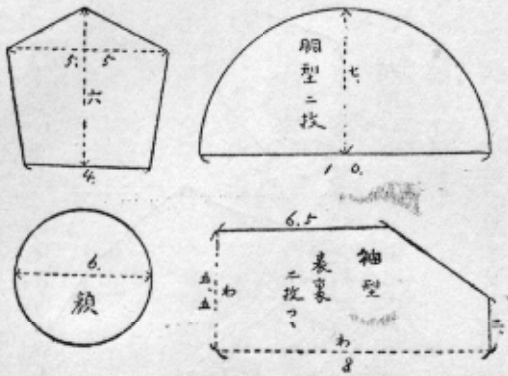
材料は地質、色合等有合せのものを用ひて、差支ありませんが、なるべく造られたものの感じのよく現はれるものを撰ばねばなりません。

三番叟出來上り



裁ち方

型紙の裁ち方



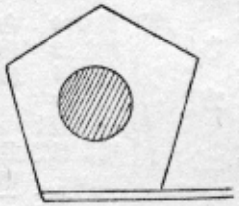
裁ち方圖のやうに、胴二枚・袖二枚・烏帽子二枚を生半紙で裁つて、其れを各の用布に貼ります。

縫ひ方

袖、上と斜めの二方を縫つて、表に返し袖口の處に赤の絹糸で三目落しで飾緤をかけて、糸端は二糎程殘して切つて置きます。

胴、胴の布の殘りから、丈一〇糎、巾二糎五耗位の縁布を二枚取つて、兩端を折り曲げて、表、裏の布で縁の布をはさんで四つ縫ひをしてから、内側の胴の表裏に緤をかけて、外側の胴の布で内側の胴をはさんで四つ縫ひにします。其時裏布は眞中で引き返へしの場所を四糎程あけて置いて、縫ひ終つてから裏から返へして、殘りを紡けます。袖は前を縫ふときに一緒に縫ひつけます。

帽子の作り方



顏の縫ひ方



帽子、三方を縫つて口に五耗位の巾の縁を白縮緬か何かでつけて、直徑一糎五耗位の日の丸を二つ切つて、烏帽子の中央に貼り附けます。

顏、丸く裁ち切つた顏布の周圍を四耗位の縫代で縫つて、中に適當に綿を入れて顏の形を作ります。

次に頭に烏帽子を被せて、後で紐を結んで、頭を袖から五糎位離した位置に附けて袖の端を目立たないやうに胴に留めます。そして胴の縁に二本の紐を通して、胴の中に綿

を入れて、紐を結びますと、出來上りの圓のやうになります。

八、菊形肘突

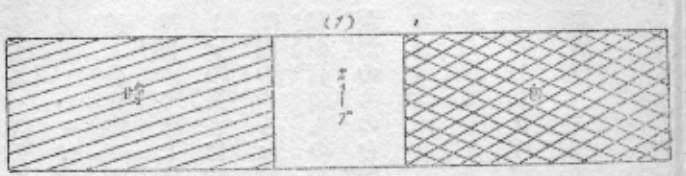
材料

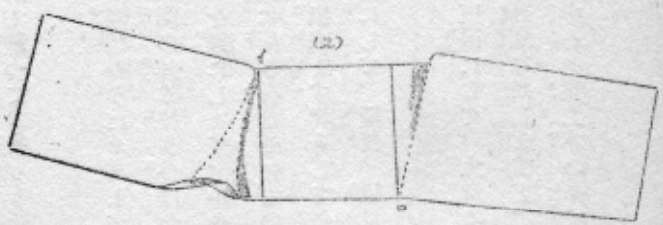
時色縮緬　並巾二〇糎
白縮緬　並巾二〇糎
オリーブ縮緬　並巾一〇糎
黄絹糸　一把
綿　少許

裁ち方

時色と白の縮緬を巾三糎、丈六糎に各五枚と、オリーブ色縮緬を幅三糎四角のもの五枚を裁ちます。

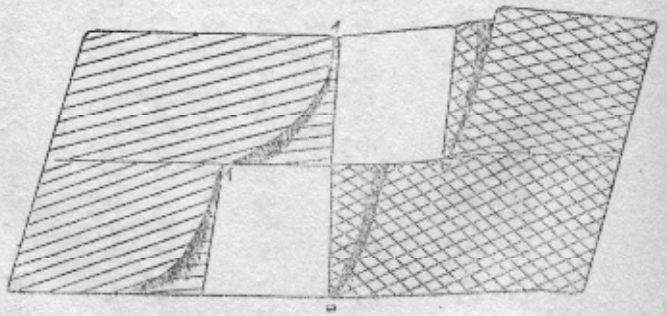
布の接ぎ合せ方（1）





布の接ぎ合せ方（2）

布の接ぎ合せ方（3）



針目をなるべく細かく縫つて、折りきせは全部時と白の方に返へします。ミシンなればなほ宜しいです。

1、接ぎ合せ方　(1)圖のやうにオリーブを中心に兩端に時と白を接ぎ合せます。

2、(2)圖のやうに(1)圖の如く接ぎ合はせたものの(イ)(ロ)の場所で中に接ぎ合はせたオリーブの長さだけを襞にします。かやうにして全部の布を接ぎます。

3、(2)圖のやうに縦に接ぎ合はせたものを更に横に接ぎ合せて、(3)圖のやうにしますと、稍斜目のものが出來ます。そして全部接いで菱形の布とします。

4、菱形のものを輪にして、縫目、縫目を二本糸で綴ぢて縫目を中でよく落ちつかせて置きます。

5、綿は厚さを凡そ三倍にして、大體の形に拵へて、綿を入れます。綿の不足の時は中の方に足します。外側に足しますと、凸凹が出來ていけません。充分綿がはいつたら、裏になる花瓣の中心を又二本の糸で綴ぢます。

6、黄の糸で花の芯を作ると出來上ります。

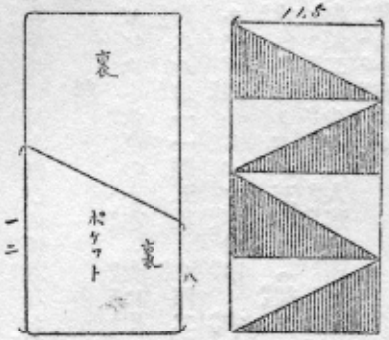
九、手輕なお裁縫用具入

小布應用の持ち運びの便利なお裁縫用具入れであります。

材料

ピンクと水色の小布（表に用ふ）
白ネル巾一一糎五粍　丈四二糎（裏口）
エンヂ繻子リボン半吋巾　丈九五糎（縁）
水色半吋リボン三〇糎（紐）
白羽二重少々（人形の頭）
其他小布少々
綿、芯紙、生半紙

掛へ方



先づ表丈を四等分したものを更に對角線から切つた寸法に生半紙を裁つて、其れを布に貼つたものを接ぎ合はせます。（ミシンなればなほ結構です。）

次に芯紙を表布の寸法通りに切つて、鋏と篦を留める位置に芯紙（巾二糎、丈四糎）を貼りつけて其れに紐のリボンを通して、表の布に貼りつけます。

次に裏のポケット布の斜の縁にリボンの縁をつけて、裏の布と一緒に襞をかけて、表布と合はせて紐を裏布に出してから、再び押へます。そして全體の縁にリボンを附けます。

次に羽二重で人形の頭を作つて頭巾を被せて、一寸着物をきせて、圖の位置に綴ちつけます。

是れで大體出來上つたのですが、餘りさびしいですからフランス縮緬か何かの薄い布を圖のやうに縫つて糸を引いて、一寸芯を入れますと可愛らしい花が出來ますから其れを表側に附けます。

ポケットの中には糸巻、指ぬきのやうなものを入れて、針はポケットに差します。

綿細工

一、提灯

材料　つま楊子　一本　綿　少々
薄糊　書用紙　少々

作り方　先づ綿を小さくちぎつて、つま楊子に段々と丸くなるやう堅くまきつけ、お團子の形にいたします。出來ましたら、薄く溶しました糊を綿の方向に一面につけて乾します。次に凡そ巾八粍、長さ四糎位の書用紙を二枚黒く染め、二つ輪をつくつて、丸めた綿の上下にはりつけ、下の方には房を、綿の中央には日の丸を書き黄色の糸でつるせば可愛らしい提灯が出來上ります。

二、へうたん

材料　針金　綿　少々

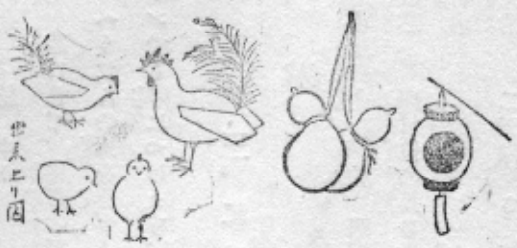
針金を芯にして、提灯の時と同じやうに綿を少しづゝ巻き重ね上下にふくらみを持たせ、へうたんの形を作ります。出來ましたら黄色の繪の具を一面に塗つて、赤いリーヤンでも飾につけます。そして一寸曲げますとかはいらしく出來ます。

三、にはとり

材料　造花用針金　約　四糎
燈芯　四寸位の長さ七・八本
竹串　一本
元結　二三糎長さ　三本
薄糊　少々　雁皮紙　尾羽

作り方

提灯へうたん鶏出來上り圖



ひよこ

用意しました針金と竹串（針金の方を少し長く）とを併せてガンピ紙で巻き、しつかりと押へます。

更にその上を頸になる部分に蠶忠五六本で巻き、少々のくびれをつけて、その上を紙で一寸押へます。次いで頭の方から胴の方へ向けて、堅く綿で巻き、薄糊を全體につけます。つけましたら掌にあてゝ、頭と胴の恰好をつくり、嘴の形をとります。

以上で身體の大體の形は出來ました。これを黄色の繪具でそめて乾かします。乾きましたら圖のやうに羽と目をつけます。

次に脚を作ります。先づ三本の元結を二・三糎に切り、針金と併せて七糎ばかり出して紙で押へ、目打錐で胴のやゝ後に穴をあけて差し込み、先の方を三方に開いて脚といたします。

おやどりはひよこと同じ作り方ですが、ただ首をやせ形にすることが大切です。羽は書用紙を切つて綿をうすくつけて圖のやうに差し込みます。

とさかは赤いきれ（ラシヤならば結構）を形よく切り糊付けしますが、雄鶏はやゝ大きくしなければなりません。目は墨で書きますが周圍を赤くぼかし、嘴は黄色にそめます。尾羽は綿細工では背負ふやうにいたしませんと恰好がよくなりません。

摘細工

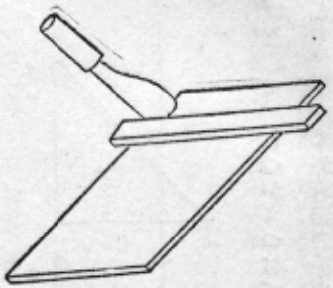
小箱または筆立などに摘み細工をつけます前に簡單に、用具、材料、裁方、染方、基礎摘などに就てお話いたしませう。

用具としては、ピンセット、握り鋏、糊板、糊筥、筆、皿などでございます。

材料は、摘用白絹、摘用白縮緬、糊、染料グリーン（青）オーラミン（黄）ブロオン（茶）ローダミレ（赤）ヴオレット（紫）ブラック（黒）アルコール、花芯、薄葉紙、及びつけます臺、小箱とか筆入、筆立、額面、寫眞挟み、柱掛、卓上置などでございます。

裁ち方は、若したくさんの枚數を裁つのでしたら、一々鋏で切りますのは大へんですから入用の布を八枚位まで重ねて折りまして兩側の端に糊をつけ、新聞紙に貼りつけます。其上にもう一枚新聞紙を載せましてよくこれも貼り圖の樣に入用の寸法の幅に定規をあてゝ裁ち庖丁で切りますと、一度に細長い八枚重ねの布が出來ますからそれを第二圖に示す樣に小口から切つて用ゐます。若し少ないときは鋏みで初めからお裁ちになつてもよろしうございます。

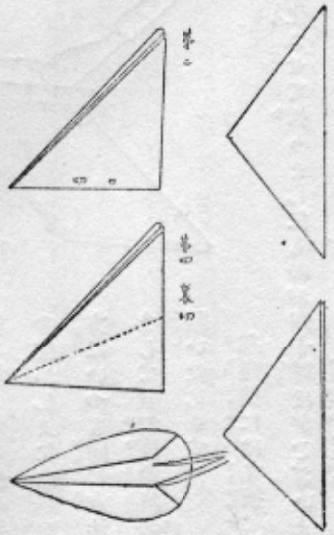
染め方は前に裁ちました布を八枚位まで重なりましたまゝ、小皿にアルコールと水を同分量混せて溶きました液を作りそれに浸します、それを輕く絞つて新聞紙の上に平にのし、別の小皿に染め樣とする色を熱湯で溶きそれを筆に含ませて好みのぼかしまたは無地に染め上げるのでございますが染め方はいつも同じ方法でございますから以下說明は略しまして其都度染料の混せ方または着色の仕方ばかりお話いたします。



基礎摘には丸摘、劍摘の二種ございましてこれを主に變化させて折りましたものが四十種ほどございますが、それは皆其とき〳〵お話いたすことゝいたしまして、こゝでは丸摘、丸摘みの裏切、丸摘返、劍摘、劍摘裏切、劍摘返だけお話いたします。

丸摘は正方形の布をピンセットで取り上げまして三角に折り、もう一度三角に折り

ますと第二圖の樣に四枚重なつた三角形が出來ます、それをもう一度三角に折るのですが今度は二枚になつてる方を兩方に分けまして第三圖の樣に折り切口を鋏で切り揃へて糊板に糊を平にのし其上に切り口を載せて用ゐますものをいひます。

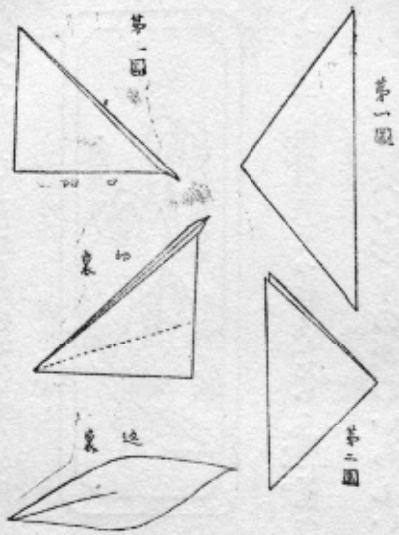


丸摘裏切とは第四圖の樣に腰を低く點線で切口を切り糊をつけて用ゐますものをいひます。

丸摘返しとは丸摘みにいたしましたものを一度糊板から取上げまして、しつかりつけてしまひ二枚になつて居ります所にピンセットを入れて離します。乾いてから切口を中に折曲げて裏返しましたものをいひます。

妻大圖

劍摘とは正方形の布をピンセットで取り上げ圖の樣に三角に折りまた三角に折ります處までは丸摘みと同じですが今度は兩方に分けずに一方にばかり折つて三角にいたします。其時、尖端を五粍ほど堅くピンセットでつまみまして、心もち下に下げますと第三圖の樣に劍の先きの樣になつて三角に折られます。此の切口を揃へて糊の上に並べ用ゐますものをいひます。



劍摘裏切とは丸摘裏切り同樣裏を切りまして用ゐますものをいひます。

剣摘返しとは剣摘みを糊板から取り上げ全部切口を貼りつけ乾いて後どちらでも一方に折つて裏返しましたものをいひます。



これで摘細工に必要なものは一通りお話いたしましたから今度は皆様が圖案しましたは寫生などしてつけて見ることは非常におもしろく且つ興深いことゝ思はれます。

こゝでは二三應用としてつけましたから順に述べましう。

パンジーのかわいらしい筆入

筆入は何んでもよろしうございますが、こゝでは一貫張りで出來て居ります色のものを用ゐました。材料としては筆入一個、摘用白縮緬、糊無白絹、青薄葉紙、花芯などでございます。

裁ち方白縮緬

花瓣　紫色　一寸二分角　四枚　丸返
同　七分角　二枚　同
同　黄色　七分角　七枚　同
糊無白絹
葉大　一寸五分角　三枚　同
同　一寸角　四枚　同
萼　四分角　一枚
花芯　二分角　四枚　ケン

染方は右の寸法に裁ちましたなら、紫の花瓣は前述の様にして新聞紙の上にひろげ小皿にヴオレットを溶きそれにローダミンを少し加へましてそれを大筆に含ませ濃淡

なしに染上げます。黄色の花瓣はオーラミンをときこれも無地に前と同方法で染上げます。葉はグリーンにオーラミン、ブロオーンを混せて青色として中央を濃くまわりを少し薄めに染上げておきます。萼は少し淡めにして染めます。



作り方

最初花瓣及び葉を全部丸摘みの裏返しとしておきます。次に筆入に下絵をかきますが、若し形がとれませんときは下絵によりまして炭酸紙を用ゐてかいておきます。

次に半紙を一糎幅位に切り小撚りをより、其上を青色薄葉紙で巻きます。これを下絵によりまして形よく枝ぶりをつけて長短三本貼りつけます。其の上端に花をつけますが、紫の花瓣を圖の様に二枚向ひ合せてつけ、上五粍ほどすらして重ねて黄色の花瓣をこれも二枚向ひ合せてつけます。下の方にもう一枚黄色の花瓣を丸味を下に先きを中心に集めてつけ、白の三粍角をケン摘の裏切として圖の様につけ、其中にバラの花芯を二粒だけつけますと一輪の花が出來ます。これを二つ下絵によつてつけもう一つは蕾にいたします。

蕾は圖の様に黄色の花瓣の上に紫の花瓣を二粍ほどすらしてつけ横の方に紫の花弁を二つ折りにして型おもしろくつけます。今度は葉をつけますが、これは下絵の位置に半分折りましたりまたは丸みをつけたりいたしましてなるべく自然に近い葉の形としてつけて出來上ります。

ゼラニユームの小箱

材料としては錦紗縮緬か羽子張りの小箱一個、摘用綉無白絹、青色葉紙、バラの花芯一把、ビロード等でございます。

裁ち方

白糊無絹花　二糎二粍角　六十枚　丸返
同赤蕾　一糎五粍角　五枚　同



同青蕾　一糎五粍角　十枚同
同蕚　一糎五粍角十五枚丸裏切

染方

赤色の花に染めますがこれは赤といふても緋の色にいたします。いつもの染め方で染料はローダミンに少量のオーラミンを加へますとよい緋の色となりますからそれで中央を染めまわりはそれに少重のブラオンを入れて染めあげます。蕾は緋色ばかりで染めておきます。

葉はピロードの裏にヤマト糊を其まゝ平に塗りまして乾かし下繪によりまして圖の様に大小とりませて切抜きます。これをグリーンとブローン少し混せて葉の色とした染料にアルコールを少量加へまして全部浸し丸染めといたします。これを陰ばしいたしておき其殘りの染料にオーラミンを少し加へまして青蕾及び蕚をいつもの通りにして染め上げておきます。

作り方

全部染めました布を陰ばしにし乾きましたら花、蕾、青蕾は、丸摘の返しとしておきます。次に小箱に前述の様にして下繪をかきます。こゝでは藤色の繻子張り丈け十八糎、幅十二糎の小箱を用ゐました。次に半紙を三糎幅に切り小撚りをより、其上に二三枚重ねてよりまして圖の様な太さといたします。上巻を青色薄葉紙でいたしましてこれを大小二本つくり下繪を位置に枝ぶりをつけて貼りつけます。次に小さい花軸や蕾（青は青色薄葉紙ばかりで細く小さく幾本も巻きまして、これも下繪によつて上向

七本ばかりと下向きも八本ばかり一糎五粍位の長さに皆長短をつけて貼りつけます。花は前の花辨の糊も乾きました頃ですから半紙を直徑一糎位の丸に切りましてそれに五辨づゝ形よくはりつけてこれを十個つくります。これを下繪によりまして上向き横向き下向きなど花軸の上につけまして中には蕾も入れてつけ、下向きの蕾の軸の長い方には赤の蕾、短かい方には青蕾をつけまして、蕚を丸摘みの逆附けとして蕾の上に先きを三つに開いてつけます。

葉は前に切りましたものに筋鍛で葉脈を入れましてこれも下繪によつて大中小形ちよくつけて出來上ります。

チユウリツプの筆立

材料としては、筆立一個、糊無白絹、青色薄葉紙、とあれば出來ます。

裁ち方



花糊無白絹　四糎角　六枚
同　三糎五粍角　六枚
葉同　六糎角　四枚
同　五糎角　八枚

染め方

花は全部オーラミンでいつもの樣にして染め中央だけローダミンを大筆に含ませて染めますと、まわりは黄色に中は緋色にぼかし染めになります次に葉はグリーンにブローンを加へまして葉色に調合し中央を濃くまわりは幾分淡く染上げ陰ぼしにして乾かします。

作り方

花を第一に丸摘みの返しにいたします。次に半紙で例の通り小撚りを作り三枚位重

ねた太さにして上巻を青の薄葉紙でいたします。これを花軸として筆立の一面の中央につけます。其上に花を圖の樣に先きを上にして二枚少し重ねてつけ、上に大きい花辨を載せて形のよい花といたします。次に葉は小の布を丸摘みの裏切りとして圖の樣につけ、大の葉も同じく形よくつけます。これを向ふ側にもつけ一方の側にはそれよりも高さを低くして葉は兩側に二枚つけ、これと同じく向ふ側にもつけて出來上ります。

リボンアート

バラ飾り

婦人服を華やかに、又は女子兒服を一層かわゆくするために、帽子や洋服に應用の出來るバラ飾りの作り方を紹介します。

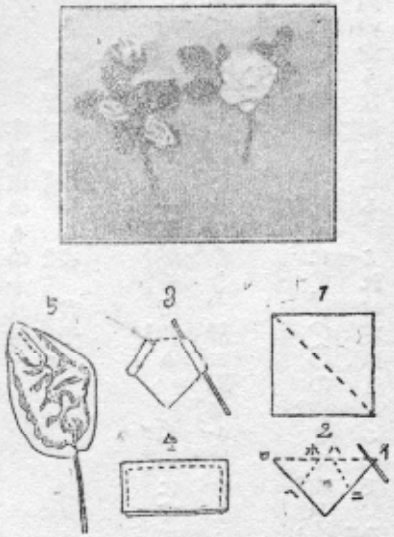
材料

絹縮子　二吋半の角十六枚
　　二吋角　八枚
ピロード又はリボン
　　半吋巾のもの十八吋
その他蕚辨に用ゆる布　若干

作り方

二吋半角の布を第一圖點線で折り、三角形にする（第二圖）その一角(イ)に金縁棒をあて(ハ)(ニ)の邊まで巻き、靜に縁棒を抜きとり、ほどれぬ爲め(ニ)の所を糸で一針止めておく。

次に(ロ)角から前同樣に(ホ)(ヘ)の邊まで布を巻き(ヘ)の所で糸止めをすると、第三圖のやうな形になる。これは花辨となるので、全部で二十三枚作る。今一枚殘つた



二吋半角の布に綿を入れて、桃形の綿棒を作り、その括り目太い針金を巻いて二三寸に切つて置く。

この綿棒を取巻いて、前に作つた花瓣を三枚少しづつ重ね合せて縫ひつける。かうして漸次全部の花瓣をまとめてゆきます。この際バラの感じを出す爲に、中の小花瓣はあまり開かせないで、外側になる程漸時大きく開かせることが必要です。

次に萼瓣四枚を適宜につくり、糊で付け、夢に糊を入れて、針金を通して花にピツタリ着ける。針金はゴム管を通してもよろしく、又花と同色の紙で巻きつけてもよろしい。これで花が出來上ります。

葉は半吋巾のビロードを三吋半宛に切り、第四圖の如く表を中に二つ折にして、三方を細かに縫ひ、表を出して縫糸の端をひきしめると葉の形になります。

これを六枚造つて、各の葉に第五圖の如く針金を縫ひ目に差し込み、抜けぬやうにその端を曲げておく。針金には花柄と同色の紙を巻き乍ら、三枚宛二組にまとめ、前の花に配合よく組合せます。

帽子飾

材料

白錦紗チリメン　尺巾五寸

造花用バラの葉　大一枚、中二枚、小二枚

染料　グリーン（青）

白の錦紗チリメンを二寸五分角八枚に切り、横の中央の布目の糸三四本を引張れば

リボンアートへ

細かいしわがよるから、そのしわを中の方によせる、次にその中央から左右二分距つた所の糸を二三本宛前と同様に引き小じわを中の方によせておきます。

次に縦の中央の糸も、前同様三ケ所で二三本宛引張り、小じわを中の方に寄せておき、これに綿を軽く入れて、丸い球状に作り、糸でくくり針金の先に糊をつけて差し込み、細く切つた青紙を巻きつける。これで果實のやうなものが出來上ります。

これを八個作り、上よりグリーンの染料でぼかし、網にかけてぼかします。これを寫眞のやうに組合せ、葉を組み合せた

帽子飾





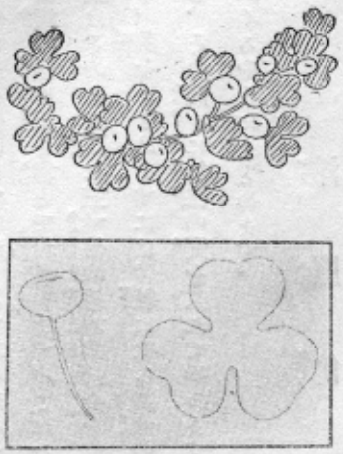
ものを添へますと、上品な飾りが出來ます。

クローバー帽子飾

材料はお好みの色のビロード八寸、丈三寸五分巾、綿少々及針金

作り方

ビロードの裏から姫糊（ヤマト糊にてもよろし）を塗り、よく乾して圖のやうに三ツ葉の形に、大中少八枚きります。次に、三寸位の針金の先端に少量の綿をつけ、それに糊をつけて左手の食指と中指との間に挟み上を親指で押へ乍ら、右手でグル〳〵と針金をま



わし乍ら玉を作ります。かうして綿に糊をつけ乍ら、適當の綿保をつくり、乾いたならば實の樣に黄と赤とで着色します。これを十二個つくります。

葉はそのまゝ裏に三寸位の造花用針金を糊でつけ、薄樣紙で一寸位づつ巻いておきます。葉をまとめますには、軸になる四寸の針金の尖端から小葉を薄樣紙で巻きつけ乍ら、その間々に綿保の實を入れてゆきます。かうして次第に中葉をつけ、中央に大葉がくるやうにまとめます。

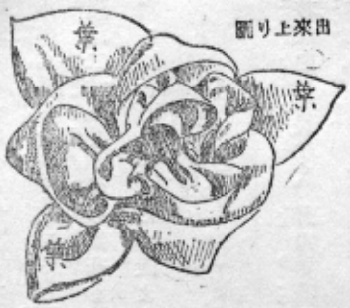
洋服飾

材料

一、金茶色襦子（色は好み）一尺巾五寸
一、黒襦子三寸六分　巾一寸二分
一、三厘針金六寸　一本

用途

一、三寸四角　三枚　花辨
一、二寸四角　五枚　花辨
一、一寸二分角　三枚　花蕊（黒）
一、二寸五分角　三枚　葉



作り方

花蕊　黒色の用布を三角に折り更らに重ねて三角に折つて、三厘の針金を木綿針に通し、切口を縫ひ三枚つけます。

花辨　次に二寸四角の用布も三角に折り、同じく切口を前の黒布を縫ひました針金につづけて五枚とも縫ひます。最後に三寸四角の用布を三角に折り、切口を同じく三枚とも續けます。

そう致しますと、一本の針金に全部長くぬひつゞくわけです。これを黒を中心に、グル〳〵ちぢめ乍ら巻き、一枚の二寸四角の用布で黒を覆ふやうにし、後の四枚はその周圍をちぢめ乍ら巻きますと、小さい花辨となります。同じく三寸四角の用布もちぢめ乍ら外側を巻きますと、形のよい花が出來ます。

葉は二寸五分四角の用布を三角に折り重ねて、又三角に折つて切口を縫ひちぢめます。これを圖のやうに配置よく三枚並べますと、出來上るのでございます。

クレープの造花

花は白、黄など、蕊は黄花の木綿糸、葉は綠、

拵へ方

一、花辨の寸法の裁ち方　第一圖の寸法によつて大小の花辨とする紙を切りましてそれを更に第二圖のやうに各辨の形に裁ち切ります。

次に鏝をかけます。先づネル二枚位の厚さの布の上に花辨の元を手前に、尖の方を向ふにしてのせ、鉛筆のサックのやうな尖の丸いもので、花辨の一枚〳〵に三圖のやうに鏝かけをするのであります。その心持は右手のサックを相當強く紙に押しあて、左の手は布をおこしながら手前の方へ持つて來るやうにしますと、花辨がくる〳〵と上ります。

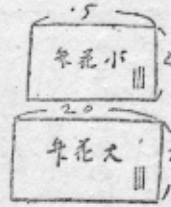


全部かうして鏝かけしましたら蕊を作ります　蕊は黄色の木綿糸を束のまま結へた位、即ち直徑一糎位の太さにして結へ、長さは一糎五粍程に切りましたものを使ひます。

蕊が出來ましたら、小花辨から順に蕊のぐるりにつけまして、全部を附け終へましたら根本をしつかり括つて蕊をつけます。

蕊をつけましたら、根本から莖用の針金をそへて綠の巻紙（綠色のクレープペーパ

1を一糎位の巾に横に切つて縮をすつかり伸したものを使ひます)でかたく巻きます。







葉は大、中、小の型紙通りに切りまして、二重葉に致します。一枝について、五六枚をつけますから、大小取りまぜて葉數の倍數だけ紙を裁ちまして、造花用の青紙を巻いた針金か、又は細い針金に前の莖に巻いた紙を巻きまして葉の蕊にいたします。

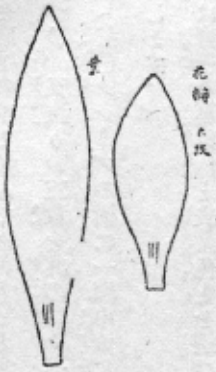
以上花と葉が出來ましたら、出來上り圖を參考にして枝振を作りつつ葉をつけますと美しい花が一枝出來上ります。

チユウリツプ

花は赤か時色のクレープペーパーで型紙の通り十二枚切り、二枚合せて一つの花枚といたします。其の時二枚の間に造花用の針金の三寸位に切つたのを中心に入れます(この針金は入れないで作ることもあります)

十二枚共かうしますと全部で六枚の花辨が出來ます。乾きましてからこれを兩手の拇指と食指で持つて外側へふくらみを作り、さきの方は波打たせておきます。





芯は造花用のを用ひても亦、黄色のクレープペーパーを一寸五分巾三寸位に切つて、其の巾の三分の二位までに細く切り込みを入れ

其れを兩手の平で揉んでクル〳〵と巻いて針金で結び、其れに前の花辨の三枚をぐるりにつけ、又殘りの三枚を其の間々へつけて根本を針金でしつかりと括り、そこから巻紙（綠色クレープの横に一糎巾位に切つて縮みを伸したもの）で巻き丈を二十五糎位にします。

葉は青色の裏葉色と表葉色とを選び、クレープを型紙通りに六枚切り、二枚合せて中心に針金を入れます。（針金を入れます時はいつも紙に糊をつけずに、針金に糊をつけておいて二枚の間に挟みます。そしてから周圍に淺く糊をつけて貼り合せます。）

葉が出來ましたら出來上り圖のやうに根本を包むやうに三枚の葉をつけていきます

コスモス

花辨は淡紅、白などのクレープペーパーを一圖の型通りに切りますと八辨の一花分が出來ますから辨の中央に少しふくらみをつけまして、其れから下部を糸で縫ひます

芯　黄色のクレープを三糎巾十糎丈に切り之れに巾の三分の二まで細く切り込みを入れまして、一方の端からくる〳〵と巻き下部を針金で結びます。



この芯が出來ましたら前の花辨をぐるりにして縫糸を締めて根本を結へます。そして二圖の様な夢をつけて根本から巻紙で巻きます。莖はなよ〳〵とした風情の現はれますやうに餘りゴツ〳〵と巻かないやうに注意いたします。

葉は三圖のやうな型に何枚も切りまして糸針金を芯にして四圖のやうな葉を作ります。そして出來上り圖のやうに枝振を見ながらまとめます。

ゼラニユーム

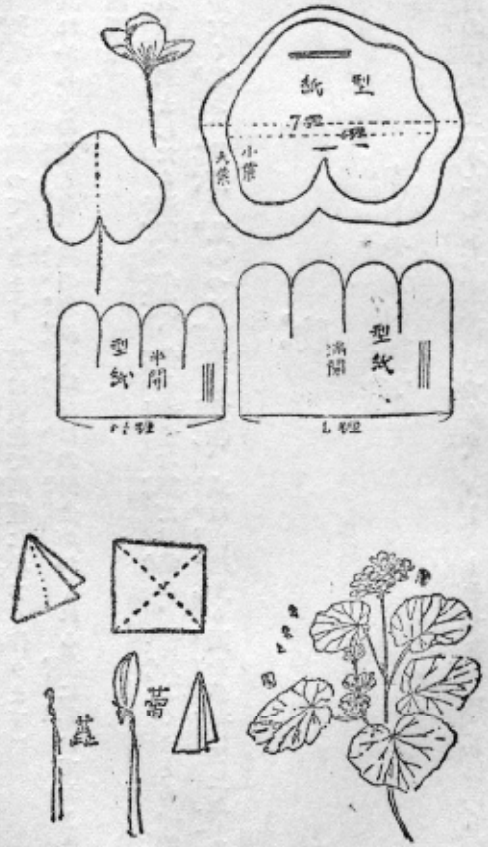
この花には眞紅、薄紅、白、斑入などありまして、花の數も一枝にいくつときまつて居りませんで一かたまりになつて咲きます。

挿へ方

先づ花にするクレープペーパーを四糎巾に横に長く（花辨の型紙の六糎の倍數）三枚ほど、切りまして、一方の端に一糎位手早く糊をひいて二枚を貼り合せます。半開は三糎五粍巾に一枚切りて同樣に貼ります。これが乾きましたら型紙に合せて、其れ〴〵裁ち切ります。

葉は青紙を卷いた針金を芯にして、大葉、小葉を合せて五枚ほど作ります。貼り合せますには芯の針金に糊をつけて二枚の間に入れ、後に周圍に淺く糊をつけて貼ります。

次に型通りに裁ち切りました花辨の一片々々の眞中にふくらみをつけ、下部を縮ませて芯のぐるりにつけ糸針金でかたく根本を結り針金は拵つておきます。



蕾は花と同色のクレープ三種四角で圖のやうに三角に折りたゝんで根元を針金で結へ、矢張り端は撚つておきます（芯は黄色で同様に小さく作ります）其れからどの花も皆、綠の巻紙で結び目の針金がかくれる樣に巻いておきます。（枘は四五種）

以上出來ましたら滿開、半開、蕾を適當な數だけ集め、恰好よくまとめ、莖は巻紙でかたく巻き、枝振、葉のつけ方等は實物、或は出來上り圖を參考にして下さい。

編物

赤ちやんの帽子

白の極細を二本にして七十五目をつくり、ガーターを七段編み、其れから兩端の三目だけをガーターに、中はメリヤス編にして九糎程を編んでから、全體の目數を五等分して其の各々の角で一段おきに一目づゝを減じます。



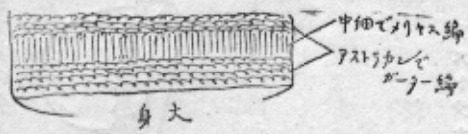
そして全體の目數が三分の一、即ち二十五目になるまで減じてから全部の目に糸を通して括り、前に目を減じ初めたところまでを綴ぢ付け、最初のガーター三段ほどを表側に折り返し、其の端にレース編の飾を編み、出來上り圖のやうにリボンで花を作りこれを飾りとし紐と一所に附けますとすつかり出來ます。

五・六歳用のケープと帽子の編み方

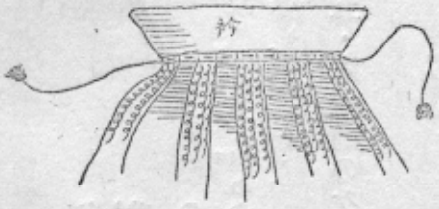
材料

アストラカン　半ポンド
中細毛糸　一オンス
一、ケープの編み方

最初アストラカンで丈だけの目數（羽織丈より少し短い目に、約五十位）を作りまして四段だけガーターを編み、つゞいて糸を中細に代へてメリヤス編を三段編みます

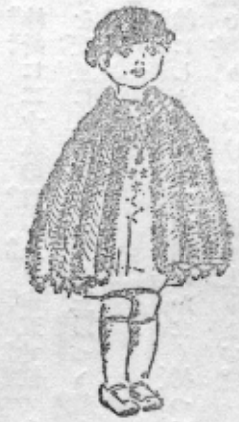


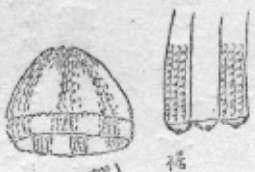
次に又アストラカンでガーター四段、毛糸でメリヤス編三段とを繰り返して二尺程（身幅だけ）編みまして止めます。



今編みました胴の一方の端（二尺の長さの片方）を三分の一位の幅になるやうにつめて鉤針で短編を一通り編み、引き返して今度は長編で一通り編みます。糸はアストラカンです。

衿の編み方、今編みました長編の上部の目をひろつて棒針でガーターを三寸編むのです





が衿は梯形になる様に一段おき毎に一目づゝを増していきます。

飾、裾になる方には飾を編みます。編み方は上前身の隅から糸を出して、鎖を五つ（一寸位）編み、終りの目に長編を編む時のやうに糸を掛けては引き出し、掛けては引出し三遍して、これを一度に引き抜いて締めますと玉が出來ますから、其れにつゞいて又鎖を五つ編みまして、次の毛糸（メリヤス編）との境に短編みで止めます。そして又すぐ鎖五つ編編んで玉を編み、鎖五つして次の毛糸との境目に短編で止めます、これにつゞけて終りまでいたします。

妻大圖

紐　紐は二本糸で鎖を二尺五寸程編み、先きに鈴の前に編みました長編の目を三目おき位に抄ひまして、兩端へ玉の飾をつけますと全部出來上ります。

二、帽子の編み方

棒針に二十八の目（上り巾五寸位）を位りケーブと同じやうにアストラカンと中絲とを交互にしてガーターを三段づゝ編み、頭の廻りだけになりましたら止めて輪にします。

輪にしました一方の端はかたく括つて他の一方は一寸程表へ折り返して、緣に丁字編で飾りをつければ出來上ります。

マーガレツトオーバー（五・六歳用）

材料

中細毛糸　八オンス

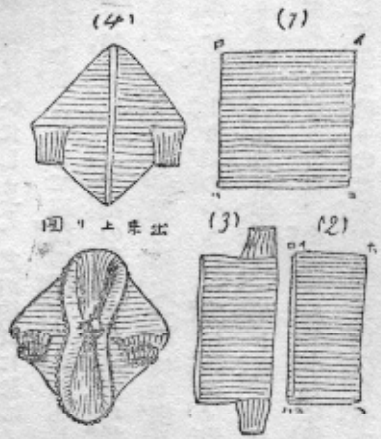
飾用リリーヤン或は變り色毛糸　少々

編み方

羽織の裾巾と同寸だけの目を作り、これを基礎としてガーター編みで巾と丈とが同寸になるまで編みます。つまり四角のものを作るのであります。

四角が編み上りましたら一圖のイ—ニをロ—ハに重ねますと二圖のやうになりますから、今度はホ—ロの間の半分だけを裏から目立たないやうにかゞります。同樣に他の一方のヘ—トの二分の一だけもかゞります。

次に三圖のやうに今かゞりつけました殘りの部分の目をひろひましてゴム



出來上り圖

編を四寸位いたします。之が袖口になるのであります。

三圖を開きまして四圖の様な形にしまして、二圖の時かゞりつけました丈の又半分を表に折り返して、袖の通りで目立たぬ様に一寸留め、そしてまはりに（衿に相當する部分）別糸で丁字編で飾を一まはり編みます。

次に出來上り圖のやうに一方に乳を、他の一方にボタンをつけますとすつかり出來上りますから袖口は半分表へ折り返しておきます。

ボタンの作り方は、全部短編で小さな袋を編みまして中に綿を入れ、毬のやうに丸くして編み終りの部分が見えない様に糸で綴ぢつけます。

赤ちやんの靴下

この靴下は極く簡單で然も見た目の可愛らしい編み方で、少し手馴れますと一晩で樂に編み上げることも出來ます。（編み方は全部ガーター編）

材料

白中細　三分の一オンス

編み方

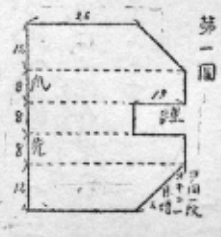
最初二十六の目をかけて編み初め、一段おきに（ガーター編は往き返りで一段）踵になる方で一目づゝを增していく編み方を十二段いたします。すると全部の目が三十二になりますから、このまゝの目數で又八段編みます。

今度は踵の方で十三目を減じて殘りの十九目を八段編み又踵の方で十三目を增して八段編み、九段目から一段おき毎に一目づゝを減じて十二段編みますと六目減つて殘りが二十六日になりますからこゝで止めます。（一圖出來上り）

今一方も同樣に編みまして、底の部（二圖のイからロの



第一圖



第二圖

間）をかゞり針でかゞります。

次に口からハの間の目を全部ひろつて、かたく締めくゝりますと爪先で出來上ります。

以上出來ましたら上部に紐通しを編みます。紐通しは長編一つと鎖二つを編んで、一目おいて又長編一つ鎖二つを編み、之れを繰りかへして一廻りし、二段目は前段の鎖の間へ短編を一つして、上に丁字編を編むあみ方を一まはりすれば出來上ります。紐には配合のよい色の細いリボンを通しますと、裝飾にもなつて本當に可愛らしうございます。

足袋カバー

材料

毛糸凡三オンス

編み方

拇指の作り方

先づ第一圖のやうに二重の輪を作り。その輪の中に短編を八つ編んで輪を引きしめ二段目は一段の目毎に二目宛一廻り編むと十六目になります。三段目から十六の目數をぐる〳〵と十段まで編んでいくと拇指が出來ます。糸の端を一寸程殘して切つておきます。

一圖



二圖



四本指の作り方

拇指と同樣に二段まで編み、第三段は小指の方になる外側の方で、目を二つ增して十八の目にします。四段以下九段まで同樣に二つ宛目を增して編んで行くと第九段の目數は三十になります。第十段は其のまゝの目數で編むと四本合併の指が出來ます。第三圖參照）

甲の作り方

四本指の編み仕舞へ、前に編んだ拇指の最後の目を編棒と一緒に連續して、拇指の殘し糸を編み込みつゝ、拇指の廻りを一廻り編み續いて四本指の廻りをも一廻り編むと、指が全部續いて丁度足袋の先を切り離した樣な形のものが出來ますからそのまゝぐる〳〵と足の文數の三分の二位まで同じ目數で（三十と十六、合計四十六目）編みます。足の甲の高い方は連續した二段目あたりから、甲の部分で一つ宛二ケ所程、目を增しておけばよろしうございます。



三圖

踵の拵へ方

先づ前の編み仕舞の目數四十六の中、上半分の二十三を甲とし、下半分の二十三を踵と定め目印をしておきます。そして甲の方は編ますに、踵の方丈を行つたり戻つたり幾度も編みます。（一段毎に裏が出たり表が出たりします。）第四圖參照

踵の後側の作り方

踵の甲に接續してゐない部分の目を拾ひながら一段編み、二段目から兩端で二目宛減じて九段まで表裏を返しながら編みます。



五圖

踵と甲との連續

次に今編み上げました踵の後側の周圍の目を拾ひながら端まで編んだなら、甲の目を一つ拾つて編み、裏返して後側の目を二つ飛んで編んで戻る。そして一方の甲の端まで來たならば甲の目を一つ拾つて編み、裏返して目を二つ飛んで又編んで戻ります。かうして甲の目を一段毎に踵の後側に連續しつゝ五六段編むと、踵の後側と甲との境に角になつた所が出來ますから、其所へ三角を入れます。

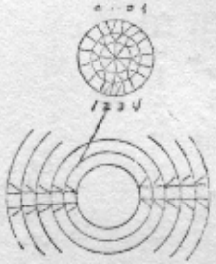
三角の入れ方

先づ角へ短編を一つ編み、裏返して二段は一段の上と甲と後側とへ一つ宛、都合三つ編みます。次に表返して二段の上三つ、甲と後側とに一つ宛、都合五つ編みますと角が目立たなくなります。つまり角の所を三段編んで其の三段目をすつと續けて表側を見ながら、甲の殘つた目を全部拾つて編んで行くと、甲の他方の端に今一つの三角があります。即ち今編んで來たまゝ引き續いて前と同樣に三段の三角を編み、その最後の目から引續き踵の後側の方向へ編み、ぐるぐる甲と後側とを連續して三週して止めますと出來上ります。

靴下カバー

二段までの編み方は足袋カバーと同樣であります。

第三段は第二段の目が十六ありますから、先づ一つの目に二つ編み之をイロとします、次の目にも二つ編んで之をハニとします。これで目が二つ增したことになり、次の目からは一つの目に一つ宛、都合六つ編んで、七つ目は又一つの目に二つ編んで1、2とし、次の目にも二つ編んで3、4とします、そして次の目からは一つ目に一つ宛六つ編むと合計二十の目になります。



第四段は第三段のイの目に一つ、ロとハの目には二つ宛、二の目からは一目に一つ宛編んで、1の目に來ましたら1の目には一つ、2、3の目には二つ宛、4の目以下は一目に一つ宛編みますと合計二十四目になります。

第五段、前と同じ樣に左右に各々二つ宛目を增して二十八目になります。

以下九段まで同樣に左右で各々二つ宛目を增して編んで行きますと六段は三十二、七段は三十六、八段は四十、九段は四十四の目になります。

第十段は增減なしに一目に一つ宛編みますこれで指先が出來上りましたのですから

左右の目數を增した所を兩横にして、平におき一度形を整へて足先を入れて見ます。そして肥つた方や、甲高の方は甲の方で幾つでも隨意に目數を增し、足底の三分の二位までぐる〳〵と連續して編んで行きます。

踵の作り方は足袋と同樣でありますから省略します。

赤ちやんの帽子

材　料

白レース糸　一玉
白絹テープ　六尺五寸

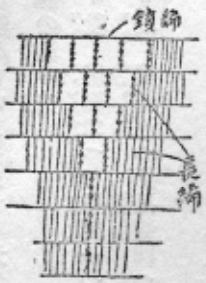
編み方

鎖編を五つ編んで輪にし、この輪の中に短編を十だけ編みます。

二段の終りに鎖を三つ編んで、次の目に長編を一つと鎖編一つとを編んで、又次の目に長編二つ、鎖一つ、長編二つ、鎖一つを順に繰り返して一廻りすると鎖が十、二つの長編が十出來ます。

今度は三段の終りから三つの鎖を編んで、四段にうつります。三段の長編の上は皆長編を編み、間の一つの鎖編に長編を二つ編みます。但しこの時二つの長編の間に鎖を一つ編むことを忘れてはなりません。これを一廻りしますと長編四つ、鎖一つが十出來ます。

以下四段と同じ編み方を繰り返しますと長編の目數が段毎に四、六、八、十と增すことになります。



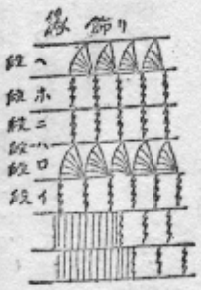
かうして十二・三段みましてから頭に合せて曲げるのであります。曲げ方は、長編の目數で二つ宛增したのを、反對に二つ宛左右で減らします。そして前に鎖を編みましたところを長編と鎖編とで一圓のやうに順

々に編んでいきまして、元からの長編が一つになりましたら縁にうつります。

縁の編み方

イ段　鎖編二つ、長編一つ

ロ段　鎖編三つと長編四つをして前段の長編の上へ短編で編みつけます。



ハ段　鎖編四つと短編一つ

ニ段　鎖編二つと長編一つ

ホ段　ニ段と同じであります。

ヘ段　ロ段と同様、

以上各段共一廻りづゝ編むのであります。

飾の編み方

花、鎖編を五つして輪にし、其の中へ短編一つと鎖編一つ宛を五回編んで一まはりします。

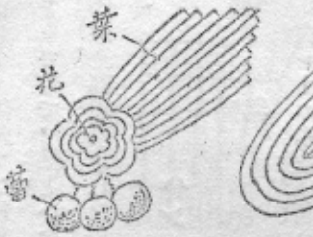
二段目の鎖編の中へ長編を五つ編み、短編のところへは矢張り短編を編んで、これを一廻りすると辨が五つ出來ます。

今度は鎖編三つ（長編の下側になる）短編一つ（前段の短編へ編む）をして一まはりします。

前段の鎖編の中へ長編を九つ編み、又短編を一つして一廻り編みます。

以上を繰り返し順々に花辨になる長編の目數を增して、直徑二糎五粍位の花を作ります。

葉、葉はよろひ編み（短編を裏表繰りかへして編む）で長さ五糎、巾三糎五粍位まで編みます。





蕾、短編で直徑一糎位の袋を編み、中に綿を入れ、口元は順々に目數を減して丸い玉にして、鎖編で二糎程の柄をつけ、これを三つ作りまして花、葉、蕾を圖のやうにまとめて附て、飾といたします。

飾が全部出來ましたらテープを通します。

ハンカチーフセフ

材料

白レース糸或は新カタン　一つ

編み方

一段、鎖編を百二十編んで之を輪にします。

二段、前段の鎖編の一目へ、一つづゝの長編を編んで一廻りします。

三段、二段からのうつり目の分に鎖編を三つ編み、つゞいて二つの鎖編を編んで、

二目飛ばして三つ目に長編をします。そして又鎖編二つしては二目飛ばして長編と、これを繰り返して一廻りいたします。

四段、三段と同じ編み方ですが、表側の初め終りと、裏側の初め終りで一圖のやうに目を一目づゝ増しますから一廻する間に四目だけ目が増されます。この目を増すことは一段おきに三回いたします

五、六、七、八段は全く同じ編み方を繰り返すのですが六段、八段では目を増します。かうしますと袋の口より段々と廣くなつて來ます。

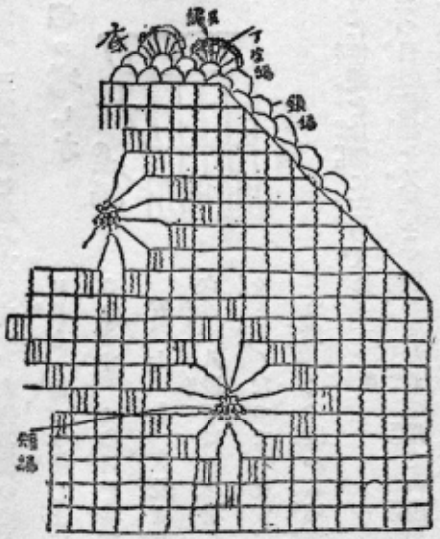
九段　この段から模様を入れます。模様は出來上り圖のやうに櫻菱を片側に三つ入れます。

三つ目の模様を入れます段から左右の端で一段づゝ、圖のやうに目を減じて袋の裾を段々と狹めていきます。そして模様を編み終へましてから一段だけ編んで止めます

目の増し方



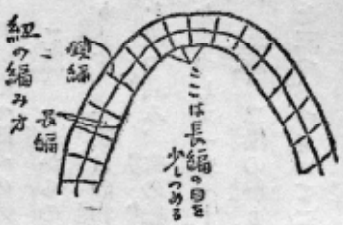
と、底に六糎程穴のあいた袋が出來ます。



今度は上の垂れを編みます。今迄編みました袋の口の片側だけに、長編を一通り編み、二段目からは袋と同じ編み方で九段編めますが、こゝは袋になつてゐませんから裏表が出るやうになります。そしてなほ二段目から幅の中央に櫻菱の模様を一つ入れます。

以上出來ましたら飾にうつります。飾は袋のぐるりに最初鎖編五つを編んで短編で止め又鎖編五つしては短編みと、之を繰り返し二段いたしまして、三段目は前段の鎖の輪の中へ長編を六つ編み、次の鎖の中へ短編で編みとめ、又長編六つしては短編で止める編み方を一廻りします。そして今度は上に丁字編を一通り編んで終ります。





垂の飾も同じ樣な編み方をしまして、ボタンをつけます。ボタンは全部短編で直徑八粍位の玉を作り芯には脫脂綿を入れます。

次は紐ですが全部鎖編と長編で、袋の一方の端から編み初め他の一方へ編み止めます。

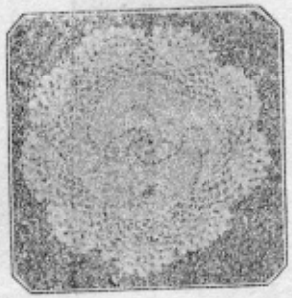
レースの皿敷

材料

白レース糸　一つ

編み方

一段、鎖編五つを輪にして、其の中へ四つの鎖編と一つの短編を四遍します。



二段、一段からのつゞきに鎖編を四つして二段にうつります。一段目の初めの鎖編の中へ短編を三つして鎖編を四つ編み、次の輪にも同じ様に短編を三つ編んで鎖編を四つして一廻りします。

三段、二段の終りに鎖編を四つして次の輪の中へ短編を三つ、つゞいて二段目に編んだ三つの短編の上にも二つ、(二段目の三つの短編が一つ殖ります。)都合五つの短編をして鎖四つ、又短編を五つと鎖編四つ、之を繰り返して一廻り編みます。

四段、これからは皆三段と同じ編み方であります。たゞ短編の目數が、鎖編の所で二つづつ增すのですから、一廻りする間に八つの目數が增します。これを順に繰り返して十四段編みますと圖のやうな形が出來ます。



十五段目は十四段の終りの鎖編を四つ編んで次の段の短編にうつりますのに、前段の鎖編の中には編ますに短編の二つ目から短編をして終りの鎖編に三つの短編をして鎖編を四つします。そして又次の短編を一つ飛ばして二つ目の短編の上から短編をして終りの鎖編を四つします。之を繰り返して十一廻り編みます。さうしますと直徑三寸位になります。

飾の編み方

一段、鎖編を四つ編んで短編の目を三つ飛ばして四つ目に編みつけ、又鎖編四つと

短編を繰り返して一廻りしますと四十五出來ます。

二段及三段は五つの鑽で、四段五段は六つの鑽で網を編みます。

六段、初めの鑽の輪の中に七つの長編を編み又五つ目の輪に同じく七つの長編を編みます、これを續けますと一廻りする間に長編が七遍出來ます。

七段、六段に編んだ長編の上に又長編を十四しますと鑽編の目が三つになります。

八段、前段十四の長編の上に又長編をしますが、今度は一つの目に二つの長編を入れ、一つの鑽編をして一目飛ばして、又長編二つをします。そして鑽の網が二つになりますからこれを一廻りあみます。

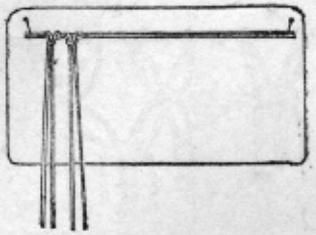
九段、八段の長編の上に又長編をしますが、今度は前段の鑽の中に長編を三つにして全部を編みます。

十段、鑽編を三つして輪を作り一つ目に之を三つしては次へ進んで一廻りしますと全部が出來上ります。

マクラメ編みの電燈カバー

材料及用具

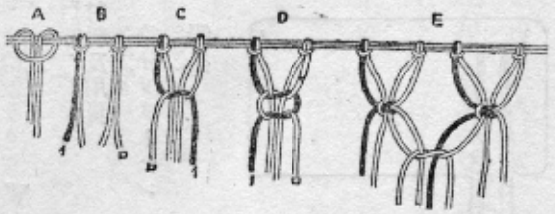
染分リリーヤン　大束　一把
鍍臺　一
待針　四・五本



編み方

先づ最初にリリーヤン二本を圖に示しますやうに鍍臺の一端に待針で左右に堅く張ります。（これを基礎コードといひます。）

次にリリーヤンを束のまゝ一ケ所切り、其の一本〳〵を二重にして輪になつてゐる方をコードの下から通して



その切り端の方を輪の中にくゞらせて（一圖A）堅く締めます。（B）これを六十本掛けて、其の四本づゝを編み合せて七寶結びにいたします。即ち四本をよく揃へて藥指と中指の二本を持ちイの糸を中の二本の糸にのせて右へ曲げ、ロの糸をイの糸の上から、中の二本の糸の下をくゞらせて左に曲げ、イの糸の上に引き出します。（C）次に又、ロの糸を中の二本の糸の下から右に曲げ、イの糸を、ロの糸の下から中の二本の糸の上を通つて、ロの糸の下へ引き出します。（D）そしてそれをE圖に於けるやうに目のゆるまないやうに結ぶのであります。この結び方は片方だけ糸を引きますとゆるんで後に解ける樣になりますから兩方の糸を同じ力で引き、結び目の近くを持つて締めます。（この結び方をシングルナッツ。又は寄結びといひます。これをつゞけてE圖のやうに結びますと七寶結となります。）

次に今結んだ糸と、次に結んだ糸と、都合八本の糸の中の四本の糸でC、Dの時と同樣に結びます。かうして互ひ違ひに網のやうに、つまり七寶結を十三段編みます。

次に飾の結び方をいたします、十三段結び終りましたら、四本の内、中の二本だけで三圖のやうに結びます。初め右の糸を左の糸にくゞらせて、その糸を手前に引かすに向ふの方に引き、左の糸を手前に引きます。次に左の糸を右の糸にくゞらせて前と同樣に結びます。これをチエーンナッツといひます。これを互ひ違ひに五回結びます全部一廻りいたしました時、今結んだ糸と殘しておいた外側の二本の糸で前の寄結を結ぶのでありますが、其の時中の結び終り目よりも兩側の糸を一分位弛めに結びまし

三圖　チエンナッツ（鎖結）



て固く糸を締めます。

次の一段は七寳結にしまして、其の次の段は又中にチエーンナツツをした編み方をいたします。

最後に下にさがつて居る糸を三寸位殘して揃へ切ります。

マクラメの鳥籠

材料

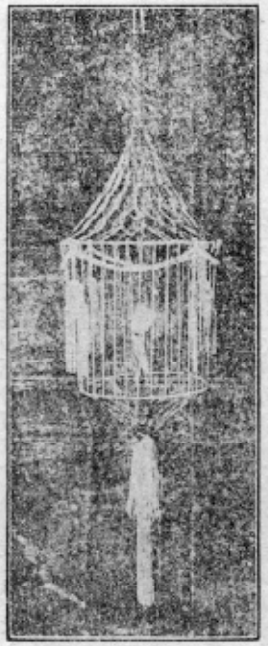
大束リリーヤン（電燈カバー用）　一把
小束リリーヤン　一把
セルロイド製の鳥と輪　一組

拵へ方

一、籠の作り方

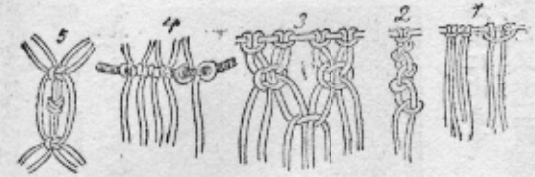
大束のリリーヤンを束のまゝ任意の所で切り、其の内四十八本を取ります。

別に長さ十四・五糎の紐をチエーナツツ（第二圖）で組み、二つに折り曲げて輪の方を上に向け前の四十八本のリリーヤンの上の端から約四糎程下つた邊でリリーヤンの中心になるやうに包んで堅く外から括ります。すると上部四糎程のリリーヤンが折り返つて括つた糸はかくれてチエーンナツツした紐が上に出ます。



次に又十二糎程下つた所をもう一度括ります。（この十二糎の間は三つ編みにしても亦他の組み方にしてもおもしろうございます。）

籠の屋根は第三圖のシングルナッツを六段致します。（つまり七寶編みが出來るのであります。目の大きさは二糎五粍位）其れから大きい方の輪に第四圖のフラントナッツで結びつけます。



そして其の下の方は十八糎程そのまゝにして、其れから二本宛で一つ結び玉を作り、直ぐ小さい方の輪に前と同じフラントナッツでつけますと籠の周圍が出來ます。

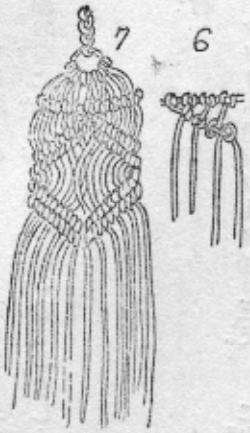
次に又四段シングルナッツをします。但し三段目の時、第五圖のやうに一つ結び玉を入れます。そこで又初めの樣に全部の糸を括ってかたく搏りますと籠の底が出來ます。

こゝから又十五糎下つた所をもう一度堅く括つて、左手で結び目をつまみ、右手で中央のリリーヤン一・二本を三・四糎引き出しますと外側の糸がたるんで丁度房の樣な恰好になりますから、

更にその下を切り揃へます。

二、飾の作り方

飾用のリリーヤン、即ち小束のを束のまゝ切つて二十四本を取り、之を四隅の飾にします。先づ別糸一本をコードにして六本を掛け、一糎下つた所で、右端の一本を恣糸にして殘りの十一本でループをします。



更にこれを中央から六本づゝに分けて右六本は六圖のやうに左端の糸を恣糸にして左からのループを二通りし、左の六本は反對に右からのループを二回します。

次に左の六本は左からのループを二回右六本は右からのループを二回しますと第七圖のやうな飾が出來ます。これを四つ作ります。そしてこれを籠の四ケ所に

つけ、なほ殘りのリリーヤン或は別の糸がありますればそれで飾りと飾りの間に七五三縄の様に糸を組んでつけるのもおもしろうございます。

菜

材料

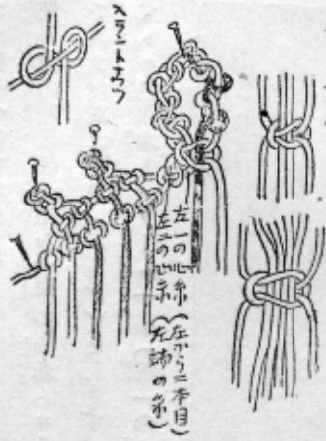
クリーム色リリーヤン　三尺　二本
トキ色　同　同　四本

編み方

クリーム色二本の眞中にピンを刺し、チエーンナッツを五つ宛結び、その結び仕舞で四本のシングルナッツを一つします。

別にトキ色四本を、一本づゝ眞中をピンで刺し、チエーンナッツを二つづゝしておきます。

今チエーンナッツしたトキ色の二筋を圖のやうに、前に結んだクリーム色の左に、斜にピンで止め、左から二本目のクリームの糸を左手の心糸にして、左端の糸及び今新らしく添へたトキ色の四本の糸でスラントナッツをします。次に今最初にスラントナッツした糸を心糸にしてトキ色四本を左端にあるクリームの糸でスラントナッツをします。



右側も左側と同様に別にチエーンナッツして置いたトキ色の二筋を右斜にピンで止め、殘つたクリーム二本とトキ色四本とで左のやうにスラントナッツをします。そして左右の心糸の角をピンで止めておきます。

次に中央に垂れたトキ色六本でダブル

ナッツを一つしておきます。

第一段の左二の心糸を右手の心糸（コード）にして殘りのクリーム一本とトキ色四本でスラントナッツ（ループ）をします。次に又左端のクリーム糸を第二のコードにしてトキ色四本とクリーム一本（第一の心糸）でループします。



右側のトキ色二本でチエーンナッツ七、一番端のトキ糸でチエーンナッツ十回します

左側も右と同様にします。

次は最初と同様に菱模様を作ります。

今度は中央のクリーム四本で寄結三回、其の左右側のトキ色二本宛でチエーンナッツ八回をして、眞中のクリーム四本を挾んで兩側のトキ色二本宛でチエーンナッツを十二回宛結び、その結び仕舞の糸で前のダブルナッツの下にもう一つダブルナッツをします。

これで出來上りましたから、糸を切り揃へて、切り端の長い糸二本を上部の鎖の輪に通して結んでおく。

右例も左と同様にします。

中央のクリーム四本で寄結を三回し、其の

方形模様手提

材料

リリーヤン　六把

色は配合よき二色、或は一色でもようございます。

編み方

（今假りに赤白で說明します。）

模様は八の倍數ですから、リリーヤンを束のまゝ一ケ所切りまして、八十本を基礎コードへ端から張ります。色の取り方は、赤四本、白八本、赤八本、白八本と八本づゝ交互にして終りは赤四本にします。

一段、左の二本を殘して次の赤六本と、次の白六本で二本宛の籠目を組んで、今殘しました左の端の一本をコードにしまして、其の右の七本でルーブをします。今初めにルーブしました糸をコードにして其の右六本とコードであつた糸とで今一度ルーブをします。

次は今籠目に編みました次の白二本の中の右糸を左手のコードにして其の左の七本でルーブをします。次に今初めルーブしました糸をコードにしてその左の六本と、今コードであつた糸とでルーブをします。之を右端まで繰り返します。

二段、左八本は輪にしました時模様を合せます爲めに殘して、次の八本で一段の時コードにした糸を矢張り右手のコードにしまして、次の七本でルーブをしますが、中の左右六本宛では圖の樣に籠目に編んでおきます。そしてもう一度ルーブをして、次は左手のコードにしまして一段の時のやうに右の七本でルーブを二通りします。

これをすつと右端までします。

この樣にして順に三段四段と繰り返しまして四角が縱に五つ出來ましたら輪にしまして殘した糸は模樣を合せながら前の樣に合せます。



其れから底は上側の二本と下側の二本とで左端から二重鎖を三つ宛しまして、この鎖を三本一所にして別糸で結んでおきましてから房をきれいに切り揃へます。

紐通しは鎖を附けましてもカンを附けましてもよろしうございます。

新型セーター（七・八歳用）

材料

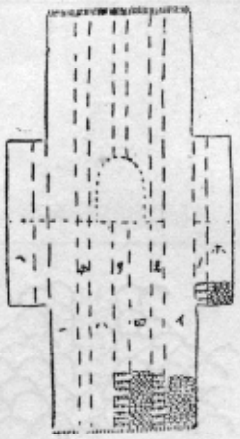
中細毛糸　六オンス
リボン　二尺

編み方

胴廻りをはかりまして其の二分の一だけを後幅とし、其れだけ鎖編をいたします。（七・八歳ですと中細で百目位が適當かと思ひますからこゝでは模様の都合で九十八の目數で說明いたします。）

九十八の鎖編が出來ましたら次の段にうつる準備としてつゞいて鎖を三つ編みます其の終りの目から三つ戻りました目に長編をします。つゞいて一つの目に一つの長編を全部しますと九十八の長編が出來ます。

長編の終りから鎖を五つして長編の四つ目に短編で編みつけ、又鎖を五つしては四つ目に短編で編みつけます。これを五遍して次は鎖を七つ編んで六つ目に同じく短編で編みつけます。この編み方を左端までしますと小さい鎖の部が四つと、其の間々に七つの鎖が三つ出來ます。



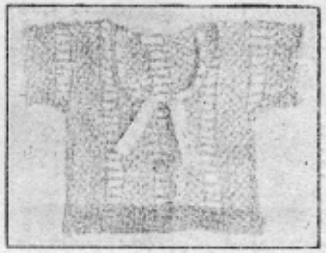
今度は又鎖を五つして三段目に編みました五つの鎖の中央に短編で編みつけ、五つの鎖を編んでは短編をすることを繰り返し、七つの鎖の所に行きましたら短編だけを六つします。そして又前と同じ方法を繰返してこの段を終ります。

又裏返して今と同じ編み方を終りまでいたします。

かうして順に裏表々々が出るやうに同じ編み方を繰り返して脇下（二十八段）だけ

編みましたら袖の分の目數を增します。

袖は五つの鎖の部分と、七つの鎖だけを左右に出しますのですから目數は兩方共二十六を增すことになり、胴の部分と合せて百五十の目數で二十段編みます。





次に衿明を作ります。衿方明は中央で圓のやうに七つの鎖の部と其の左右の五つの鎖の部の內の四つだけを編ますに、袖と胸との部分だけを繰りかへします。そして明きは十七八段にして、前袖が後袖丈と同じだけ編めましたら最初の後巾と同じ巾にして丈の揃ふまで編みます。

以上出來ましたら袖下と兩脇を鎖編と短編とで圓のやうに編みつけ、衿の廻りには配合のよいリボンを通しますとすつかり出來上ります。

羽織の紐

材料

リリーヤン　白二尺　二本　エンヂ色二尺　二本

編み方

先づ二色を一本づゝ、二本の絲で乳から始めます。眞中よりも少し乳を編み長さだけ一方によせて、そこを別の絲で假に結んで置いて、そこをピンで止めて、チエーンナツツを二十程いたします。

そして乳が出來ましたら、その中央をピンで止めておきまして、紐乳の結び目にエンヂ色を一本かけまして、都合六本のかけ絲にします。そして左からのスラントナツツと右からのスラントナツツとを互ひ違ひにします。

その結び方は、最初三番目の絲を右斜に藝絲として、これに四番目の絲で、左からスラントナツツを三つして、次には左端の絲を右斜において、藝絲にしてこれにスラントナツツを二つします。





スラントナツツ

次に右端の絲を左斜に藝絲として、三つストランナツツをします。そして又左端の絲を右斜に芯絲として、これにスラントナツツをします。そして又左端の絲を右斜に芯絲として、これにスラントナツツを三ついたします。

次は右端の絲を左斜に芯糸としておいて、スラントナツツを三つします。かやうにして右からと左からとのスラントナツツを三つづつ致しまして、適當な長さになりましたら六本の糸を二つにわけて、則ち三本づつにして、各その三本で左からと、右からと、各その端の糸を芯糸として結んでから、左右を一所にして、別の糸で假りに結んで、その輪の中に十本位の糸を房の長さに切つたものを通して、絹糸でしつかりと結びます。

腕時計の紐

材料

穴絲、銀鼠一匁、黒一匁

先づ最初に銀鼠、黒、何れも長さ三尺三寸のものを六本切ります。そして二色を一所に全部まとめて絲で結んで、そこを針でとめて十二本の絲を一本づゝ絲巻きに巻いて、銀鼠六本を右に、黒六本を左にして、一本づゝ並べて近寄らせてピンでとめておきます。

中の一段、六本の銀鼠のうち左端の絲を左手に持つて、左一の芯絲として、黒を右の端から、順々に六本共斜に、即ち右からのスラントナツツをいたします。

妻大圖

中の二段、左から二本目の銀鼠の絲を左手に持つて、左二の芯絲として黒六本で右からのスラントナツツを致します。

中の三段、左から三本目の銀鼠を左手に持つて、左三の芯絲として、六本の黒で右からのスラントナツツをいたします。

中の四段、左から四本目の銀鼠を左手四の芯絲として、黒六本で右からのスラントナツツをいたします。

中の五段、五本目の銀鼠を左五の芯絲として、六本の黒で右からのスラントナツツをいたします。

中の六段、銀鼠の右端を左六の芯絲として黒六本で右からスランナツツをいたしますとこれで中央の六段が出來るのであります。次には右側を編みます。

左側一段、銀鼠の左端（前に一の芯絲であつた絲）を右手に持つて、左側一の芯絲として銀鼠の二本目から六本目迄の絲で、左からのスラントナツツを中央を六段の模様によく添はせて結びます。

左側二段、銀鼠の左から、二本目の絲を、右手に持つて、左側二の芯絲にして、銀鼠の三、四、五、六、の絲で左からのスラントナツツをします。

左側三段、銀鼠左端から、三本目の絲を右手に持つて、左側三の芯絲として、銀鼠の四、五、六の絲で、左からのスラントナツツをいたします。

左側四段、左端の銀鼠の四本目の絲を芯絲として、五、六の絲で左からのスラントナツツをいたします。

左側五段、左端銀鼠の五本目の絲を芯絲として、銅鼠の六の絲で左からのスラントナツツをいたしますと、銅鼠の三模様が出來ます。

右一段、右端の黒の二本目の絲を右手に持つて、右一の芯絲として、其の芯絲の下から最右端の黒の絲で、スラントナツツいたします。

右二段、黒の三本目を右手に持つて、右二の芯絲として、黒の一の芯と、二の絲、

（今一の芯絲であつた絲）でスラントナッツをいたします。

右三段、四本目を右手三の芯絲として、一、二、三の絲（今二の芯絲であつた絲）でスラントナッツをいたします。



編時針註（アバロ編）

右四段、五本目を左四の芯絲として、一、二、三、四の絲（今三の芯絲であつた絲）でスラントナッツをいたします。

右、五段、六本目を右五の芯絲として、一、二、三、四、五の絲（今四の芯絲であつた絲）で、スラントナッツをいたしますと、右に黒の三角模様が出來ます。

此處で前の中央一段から、六段までの結び方を繰り返へしますが絲は黒の六本が右に、銅鼠の六本が左に、つまり、反對になつておりますから、黒の方を各の芯絲にして、銅鼠の方を結び絲とする丈が違ひますが、結んで行く順序は、前と同じであります。

次に左側も右側も色が入れ違ひになります丈で、方法は少しも變りませんから、六寸位の長さまで編みます。そして、始めと終りの端は、次の絲と次の糸とを結び合はせて、先に少し糊をつけておきます。

帶しめ

編み方、ダブルナッツ、三ッ組

材料　リリーヤン、茄子紺、一把、白一

先づ最初に絲を左のやうに、茄子紺も、白も切ります。

一丈六尺　一本

一尺一寸　一本
三尺二寸　八本
三尺二寸八本の茄子紺の絲をまとめて、しつかりと結びます。そして、其の結び目をピンで留めて、其の左側に、茄子紺の一丈一尺の絲を二つ折りにしてピンで留めて並べ、右側には、矢張り茄子紺の絲を二つ折りにして、眞中にピンをさして留めますそして留めたピンの上部の各の一本と、中央の八本の絲を輪にして留めておきます。そして手前にある長い絲丈絲卷に卷いて置きましてから編み初めます。

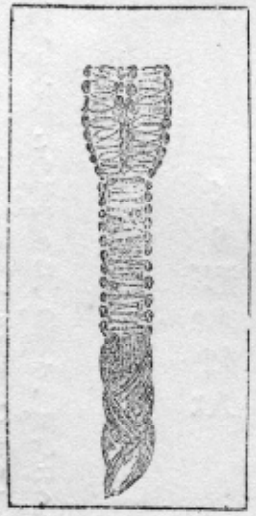
1、茄子紺の八本絲を芯絲として、それに左右の一本づゝの絲で、ダブルナツツを六ついたします。

2、次には、白も、茄子紺と同じやうにまとめて、但し一丈一尺に切つた絲を右側に、一丈六尺に切つた絲を左側にして、ダブルナツツを六ついたします。

3、次には、1と2で結んだものを一所にして並べます。

4、そして、右端の茄子紺の八尺の絲と、左端の白の八尺のものとて、ダブルナツツを十ケいたします。

5、次に左右の色を別けて、右側の茄子紺の絲と、右側の白の絲とを別々にダブルナツツを十二ケいたします。



6　次に、茄子紺で編んだ十ダブルナツツと、白で編んで十二ケとで編んだダブルナツツとを一所にまとめて、又ダブルナツツを十ケいたします。

7、次にはこの十二ケづゝ編んだ茄子紺と白とのダブルナツツの二筋と、それ等を一所にまとめた十ケのダブルナツツの一筋とを、交互に八寸五分位編みます。

8、次に全部を三つに分けて、三つ組に四寸五分位いたします。そして端を絹絲でしつかりと結んで、房を殘して切ります。

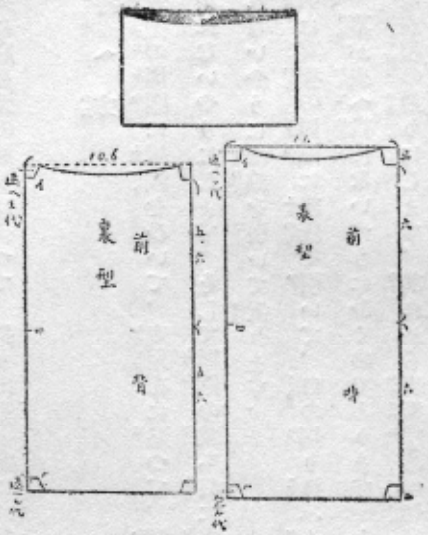
9、これで、帶しめの半分が出來上つたのでありますから、今半分も同じやうにして編みます。この帶留めは、簡單で、延びにくくて宜しいです。

袋物

くり形名刺入

くり型名刺入と申しますのは、名刺を入れる口が、くり形になつてをるのであります。

名刺の大さには大小數種ありますが、普通男子の用ひますものは、巾五糎五糎、丈八糎二糎ですから、これを横に入れるとして、其れよりも丈五糎巾一糎大きくいたします。



最初半紙を裁板の上に縦に置いて、紙の右端を少し裁ち落します。之をちり裁ちといひます。次に其の裁目から、一糎と巾の寸法を裁ち切つて、其の裁ち切つた紙の巾を二つに折つて、輪の方を手前に裁目の重なつた方を向ふに裁ち板の上へ横長に置きます

裁ち目の重なつた方で右の方から、六糎程はいつた處へ裁目を入れて、底を開いて、

其の裁ち目と裁ち目とへ定木を當てゝ切りますと、角は正しい角になります。

次に底を元の通りに折つて、折り山を手前に、裁ち目の重なつた方を向ふに置いて角へ

掛　へ　方

表型の周圍に縁糊をひいて、表用布に貼つて、型紙通りに切つて、角は直角にしてはがれないやうにします。そして周圍の裁ち目に表布の方から耳糊といつて、布がほつれないやうに縁糊を引いて置きます。

次に裏型の周圍に縁糊を引いて、口の切り込み上下六分の處へ留糊（出來上つてから、裏が表へ出ないやうにひくのであります）を引いて、裏用布に貼つて周圍、其他は表型の通りにします。其れから表型（イ）の切込みへ折返へしの筋を引き、其の筋から二粍離れた處迄五粍おきに切り込みを入れ、縁糊をひいて折り返へします。次に裏型の（イ）の切り込みと（ハ）の切り込みとの折り返へしの筋を付けて（イ）の切り込みは表と同樣にして折り返へし（ハ）の方は縁糊をひいて折り返へして置きます。

表（イ）の折山から（ロ）の切り込み迄を左右とも細い縁糊を引き、裏と貼り合はせます。此の仕方は表（イ）の折り山から二粍下つた處へ裏の（イ）の折り山を合はせ、左右の裁ち目を揃へて貼るのであります。

次の仝附けた裏用布の左右へ縁糊を引いて、裏の（イ）の折り山と合せ、左右の裁ち目を合はせて、貼り鍛をかけます。そして表型の口の切り込みから、中表に折り、表の（イ）の折り山と裏の（ハ）の切り込みとを合はせて、兩端を縫ひます。縫ひ代は三粍にして、一針ぬきにします。裏の縫目の際に鍛で折り癖の筋を引いて、表へ折り返へして仕上げ、篦で中から抜き出して、表から目打で型を正して置きます。

次に芯紙（二十番張子）を巾一〇粍、丈五粍六粍に裁つて、芯紙の兩側へ縁糊を引いて、表の布目の方へ差し込みます。其時左右の糊で縫代を貼つて留めるやうにします。

其れから包み代の左右の角へ少し糊を付け、斜に折つて貼り、其の包み代へ縁糊を引いて縫目の中へ折り返へして貼り、其れから裏の前と背の返へし代へ盤石糊、又はひくひを引いて貼り、鍍をかけて後表の前と背から鍍をかけます。鍍をかけるときは何か薄い布で覆ふてかけないと光ります。

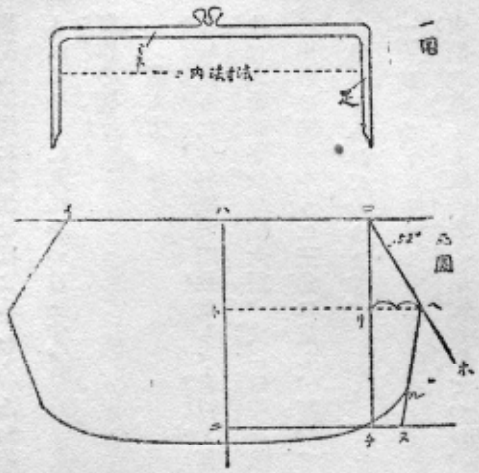
蟇口の作り方

一、型紙の割り出し方

有合せの口金に合せて型紙を作りますには口金の内法寸法を計つて其れから割出します。

二圖(イ)(ロ)を内法寸法といたします。

(イ)(ロ)線の中央(ハ)及び(ロ)に垂線(ハ)(ニ)及(ロ)(ト)を垂します。(ロ)點に分度器を當て、五十二度に標し、(ロ)から斜線(ロ)(ホ)を引き、之れを足の外側寸法の長さに合せて切り(ヘ)を定めます。



(ヘ)點から(イ)(ロ)線に平行線を引き、(ト)を定め、(ヘ)(ト)の長さを袋の高さとして(ハ)(ニ)を決めます。

次に(ニ)點から(イ)(ロ)線に平行に(ニ)(チ)線を引き、(チ)から(ヘ)(リ)の二分の一の長さを右へ取つて(ヌ)を決め、(ヘ)(ヌ)を連ね、(ヌ)から(チ)(ホ)の二分の一を標して(ル)を得ます

今度は(ニ)から三耗下つた所から(チ)(ル)を連ねる曲線を引き、左半分を同樣に合せて切れば出來上ります。

附　櫛型も同様に割出せばよろしく、みねの所は口金を當てて定め、下方は口金と釣合のとれるやうに丸味をつけます。

製作の順序

一、裁ち方

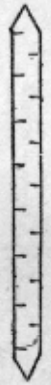
型紙通りに生絹紙で四枚裁ち、表型と裏型とに二枚づゝ分けておきます。

他に六番張子枚で幅六粍、丈（口明を除いたぐるり丈）だけの芯紙を一紙裁ち、紙丈の兩端は圖のやうに三角に裁ち、而して兩横には交互に六粍の隔りで三粍の深さに裁ち込みを入れておきます。

二、貼り方

表型二枚とも紙の表の周圍に糊をつけ、表用布の上に載せて兩横は平に貼つて鍛をかけ、丈の兩端の丸味は表は袋取つて貼ります。（袋取りといふのは用布の丈の端を型紙よりも弛ませたり、つらせたりすることで、その弛ませる仕方を表の袋取りといひ用布をつらせる仕方を裏の袋取といひます。）

次に裏型二枚を表型と同様の方法にして裏用布の上に載せ、兩横は平に貼つて鍛をかけ、丈の兩端は裏に袋取りて貼りつけます而して何れも用布の周圍を型紙通りに裁つて縁糊をします。（縁糊は布目のホツレを防ぐ爲めです。）

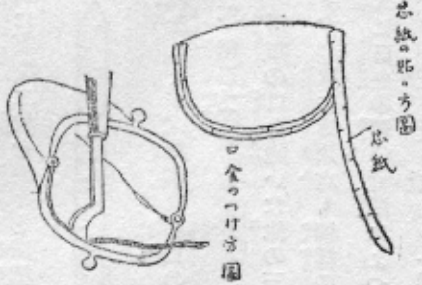


三、縫ひ方

表用布の口を除いた他の三方に糊をつけ、もう一枚の表用布と中表に重ねて貼り合せます。次に裏用布も同様の仕方で中表に貼つておきます。

次に口金の幅の寸法によつて縫ひ代を定めて表用布の口を除いた三方を縫ひ、裏用布の方は表の縫ひ代より一粍深く縫ひ、どちらも縫ひ目のすぐ内側に筋を入れ、縫ひ代に二分の隔りで裁ち込みを入れて、兩方に開いて貼つておきます。すると表用布と

裏用布とで別々の袋が出來上りますからよく縫目を槌でたゝいて折り癖をつけ、表に返しておきます。



次ぎに裏用布で出來た袋もよく折り癖をつけて縫ひ代を剪つて貼りつけ、前に裁つておきました芯紙にベタ糊をつけて、口の端から三粍程下つた所から縫ひ目の上に貼り、更にその芯紙にベタ糊をつけて外表に返してある表の袋の中へ入れて、芯紙を表の袋の縫ひ目に重ね、よく貼りつけて形を整へます。

今度は表の袋と裏の袋との口を貼りつけ、磐石糊を口金の溝の中に糊むらのないやうに引き、口金の兩横の鉄を袋の兩横の縫ひ目に當てゝ袋の口の端を裏用布の方から圖のやうにして溝の中に口金入で折り返して押し込み、而して用意してあつた紙捻に糊を引き、同じく裏用布の方から口金の中に口金入で入れ、用布が動かぬ樣に致しておきます。

以上で全部出來上りましたから、綿屑を袋の中に入れて形を整へておきます。

折紙と水引

一、金銀包

金貨、銀貨を包む折紙の名稱であります。水引により吉凶何れの場合にも用ひます

（一）　材料

小奉書　一枚、水引　金銀二尺一本宛

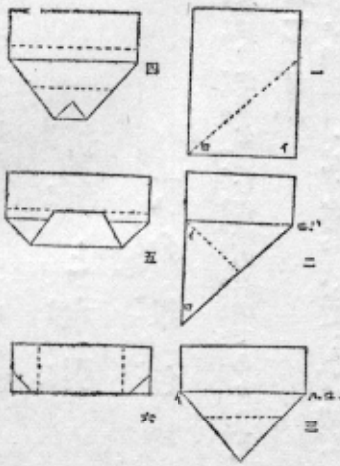
（二）　紙の折り方

紙の折り方は、表を外に第一圖に示した點線のところから折つて第二圖の如くして

更らに(ロ)と(ハ)を合はさるやうに折りますと、第三圖のやうになります。

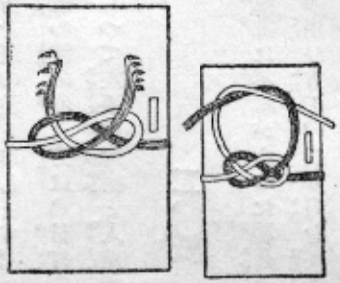
此の三圖の示す三角形のところに金子を入れますが、金子の大きさによつて、折り目の大きさを定め、第四圖のやうに折ります。この折りましたところに、金高を記入いたします。

次に第四圖に示した如く、殘りの幅を三等分して第五圖のやうに折り、更らに第六圖の如くにして、兩端が裏の中央で四分位重なり合ふやうに折ります。此の場合いつも包み紙の端を左手にし、上下は裏の方は上部の端が上になるやうに重ねます。



(三)　水引の結び方

結び方は先づ輕く水引をしごき、第一圖の如く揃へて、白で輪をつくり、第二圖の如く赤を白の輪の下から出して、先を白の上にのせ、それから第三圖、第四圖の如くに赤を通します。以上で出來上りましたが、此の結び方を鮑結びと申します。



注意、水引は種類の如何によらず、常に五本ともよく揃へなければなりません。途中重なり合つたり跨がつたりしないやうに、丁寧に一々指先で並べておちつかせ、恰好よく形を整へた上で折紙にかけ、ほどよき形にしめることが大切です。

又鮑結は折殘にかけた時に、不慣の間は、結び目が上部に向つて跳び上り勝ちですから、出來得る限り、水引の結び目が一文字になるやうにすることが大切で、殘り端が長い時は、鮑結びの上の方で輕く一つ大きく結んでその兩端を揃へて切るのも面白味があります。

若し手數のかかるのを厭はない時は、兩方の端を螺旋狀の波に卷くと、一層趣があります。結婚の場合など切るのを忌む時は、必ず此の方法を應用致します。此の卷き方を老の波と申します。

老の波の卷き方は、目打の先の方に、水引の先を三、四分出して一卷きし、それにならつて左手の拇指と人差指とで目打の先に殘した水引の上にぐる〳〵卷きつけます

二、紙幣包（凶事用）

他家に不幸があつた場合の紙幣の包み方を申上げます。凶事と祝儀の差は、主に水引の用ひ方と、折り方を反對にするの相違だけで、折り方は何れも同じでございます。ここでは凶事用の包み方を致します。

一、材料

小奉書　一枚。　水引白又は白黒一本

二、紙の折り方

紙を外表にたてに正しく置いて、中に包む紙幣の幅よりも凡そ五分ばかり廣くして右の端から左の方に、紙の厚さだけづつ寸法をひかへ目にして、左端まで標をつけて折目をつけます。

次に左端に紙幣をのせて、一卷まいたところに金額を記し紙幣が拔け出ないやうに、たけの兩端を少し三角に折つて、更に折り目の通りに右の方へ向つて、紙の上の端が左に來るやうに最後まで卷きます。

かやうにして紙の上下を折り返へすのですが、長さは恰好を見て定め、裏側に向つて兩端を折りますと出來上ります。



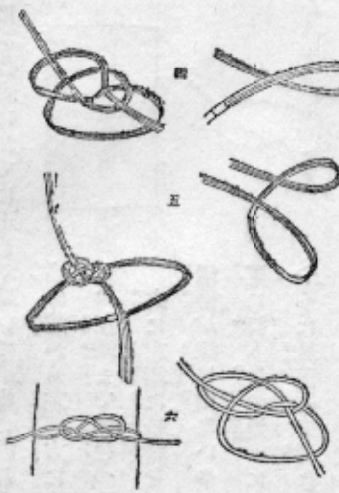




三、水引のかけ方

まづ第一圖のやうに黒を上からかけ、白を下にくぐらせ、

第二圖のやうに白を右から、黒の上にかけてしめますと、出來上り圖のやうになります。殘つた端は包み紙よりも五分位長く殘して切つて置きます。水引が長く殘つても輪結にしたり、老の波を卷いてはなりません。此の結び方を眞結びと申します。



眞結びの結び方

又次のやうな結び方もございます。第一圖のやうに初め作る輪の先を下にして、楕圓形の輪をつくり、又第二圖のやうに輪をつくつて、その端を左方に向つて第三圖のやうに、一方の端の下へくぐらせます。

而して、後から作つた輪を第四圖のやうに、最初つくつた輪の下に重ねておいて、下をくぐらせて手前の方に引き出し、程よくしめますと、第五圖のやうな逆鮑結が出來ます。而して、水引の兩端は第六圖のやうに横にひいて、包み紙の幅よりも五分づつ長くして切ります。

三、紙幣包（吉事用）

お祝ひの場合に用ひる包み方でございますが、結婚の場合には用ひません。

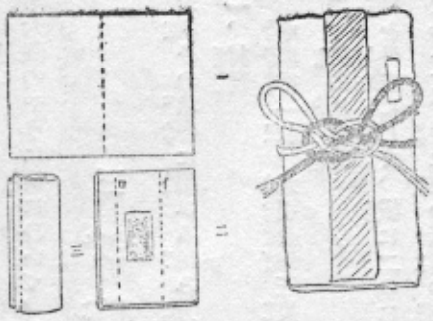
一、材料

申奉書一枚、水引金銀三尺一本

二、紙の折り方

紙を外表にして、横に二つに折ります。次に紙の輪を向つて右にして、第二圖のやうにおいて、中に包む紙幣の幅から五分廣く、右の輪の方から、第二圖(イ)(ロ)の標をして、(ロ)を先に、(イ)を後から折りますと、紙幣の上に左右から紙の兩端が重なつて細長いものとなります。

次に第三圖の點線に沿ふて、輪の方から幅の三分の一を右に折りかへしますと、出來上り圖のやうなものになりますから、恰好を見て適宜の丈に、上下を裏に折りかへして少し重なるやうにしておきます。

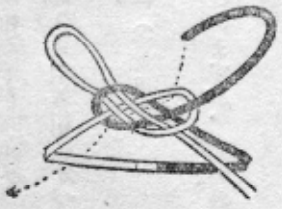


出來上り圖

三、水引の結び方

前に金銀包のところで、鮑結びを致しましたが鮑結びできびしい場合、又は鮑結びの水引の殘りの長い時次の結び方を致します

結び方の順序は先づ三尺の金銀の水引で、大きく鮑結をつくつて、銀の殘り端を圖のやうに、下から上に向つて圍く撓め、曲げて左の方に輪を作つてその端を、初めは鮑結びの銀の筋と同じやうな穴にくぐらせ、更らに銀の筋の上に引き出して、銀と金の二筋の上を跨らせて、最後に、圖のやうに右方の下の銀の筋の下をくぐらせて右の下に向つて引き出します。



わな鮑の結び方

次に右方の上にある金の端を、銀と同樣に撓め曲げて、右の方に輪を一つ作り、その端を銀と反對の順序で銀の上を跨らせ、金の下をくぐらせ、最後に金の上を跨らせて左方の下に引き出します。

四、合蝶

（一）材料

奉書　半枚（五寸四角）

赤紙　半枚（奉書より周圍一分廣く）

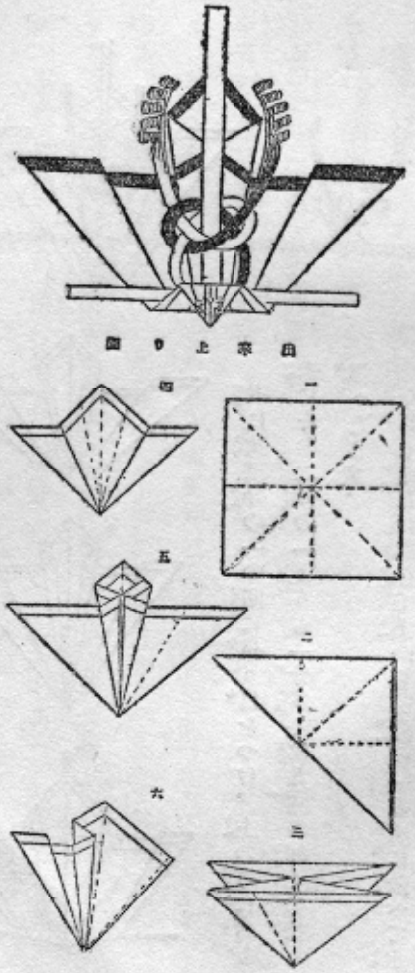
水引　金銀　一尺五寸一本
　　左巻　二尺　一本

(二)紙の折り方

先づ紙をそれぞれの寸法通りに裁ち、奉書の裏と赤紙の表とを重ね、中央を一寸糊で止めてをきます。

次に第一圖の如く折目をつけ、更らに一方の對角線を折つて第二圖の如く三角形をつくり、中央の筋を内側へ折り寄せて第三圖の形をつくります。次に中央の點線から左の角までの間を二等分して筋をつけ、其の筋から左右に開いて第四圖の如き形といたします。次にこの中心から兩横を二等分して中央に折り寄せ、第五圖に示せるやうに折襞斗の如き形にいたします。

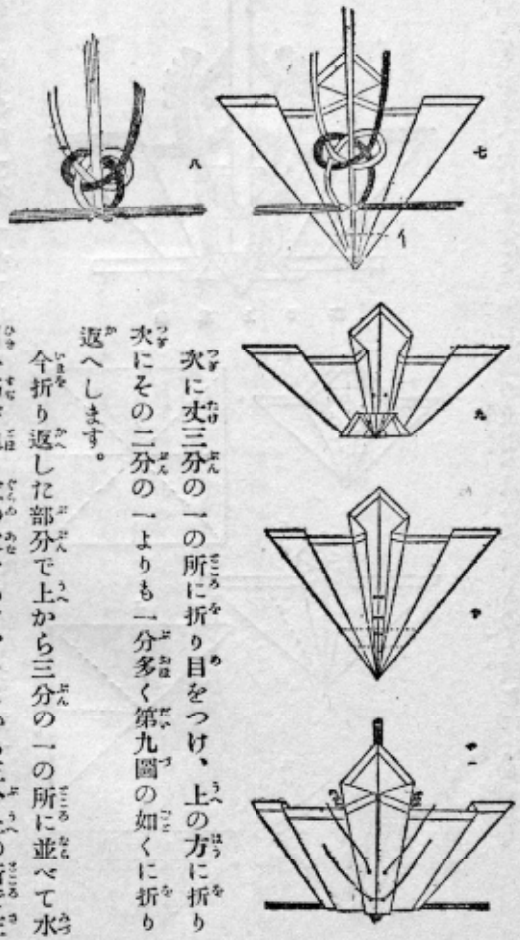
今度は右の方の二つ重なつて居る三角形の下になつて居る紙を前と同樣の方法で折ります。かやうにして襞斗と襞斗との背が中央で重なるやうになります。



圖參上ノ

次に襞斗の兩側にある三角を中央から折ると第五圖點線のやうな折り目がつき、この折目を上部で一分、下部では次第に消える程の淺いヒダに折り返へします(第六圖)

左右ともかくいたしますと、第七圖の水引をかけないものと同じになります。



次に丈三分の一の所に折り目をつけ、上の方に折り次にその二分の一よりも一分多く第九圖の如くに折り返へします。

今折り返した部分で上から三分の一の所に並べて水引一筋が通る位の穴をあけ、そこから五分上の所で左内部に二つ並べて水引一筋が通る位の穴をあけます。

以上で蝶の胴が全部出來上つたのであります。

三、水引の結び方

金銀一尺五寸の水引を一度しごいて普通の飽結びをし、第七圖の折紙の中央になるやうに、第八圖の如くやわらかにしめます。

左巻二尺の水引の中央の帶から二つに折り、更に三つに折つて切ると、一方は帶の中央から折れた五寸の丈となり、一方はばら〳〵になつた五寸の丈十本の筋となります。此の中から三本を除き、殘り七本を飽結びの帶の所に横にならべ、今切つた水引の帶のところで全部を挾み、何れの水引も動かないやうにその根元を元結で結んでおきます。帶のついた左巻の水引の端は、飽結びの中央から前に拔き出し、一本並びに並べて裏から糊を引き、場に折つた紙の蝶を取り出し、殘しておいた水引三筋の中の一筋をとり、髭斗も開いて第九圖の穴に通し、第十圖の如く次の穴にも一筋通し、第十一圖の如く裏の方へ引き出しておき、表側の髭斗を元のとほりに折ります。

第七圖の如く、折紙の上に水引をのせ、出來上り圖の如くに折り、殘りの水引一筋を裏から穴に通し、表側で眞結にしてその端を卷き、卷いたもののうち二卷殘して切り捨てると出來上ります。之を裏から見ると第十一圖の如くになります。裏の四筋の水引は銚子に結びつけるのであります。

鮑結の端は卷いてをきます。鮑結の水引は一筋でなく、二筋位は增しても差支へありません。

五、白酒の口飾

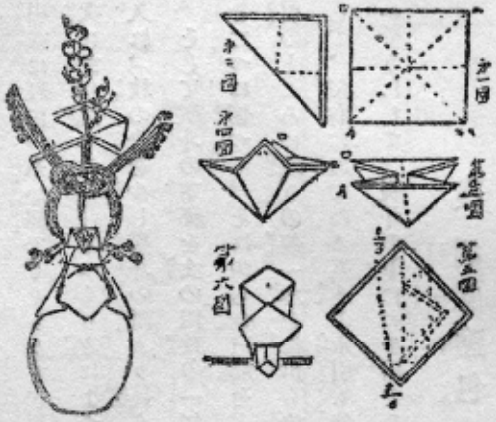
三月のお節句などに用ひる白酒の口を飾る折り方と水引のかけ方を申上げます。

（一）材料

奉書　五寸角一枚　三寸角一枚

赤紙　五寸一分角一枚　二寸五分角一枚

水引　金銀一尺五寸　二本



（二）紙の折り方

先づ五寸角の奉書の裏と赤紙の表とを重ね、周圍を一分づつ出して、紙の動かぬやうに中央を一寸糊で止め、第一圖點線のやうに筋をつけます。（對角線は奉書が外になるやうに折り、縱橫の線は反對に赤紙を外にして筋をつけます。）

今つけた線にまつて第二圖のやうにたたみます。次に第三圖のロとハの部を開くと第四圖となります。（前述の合蝶と同じ折り方）

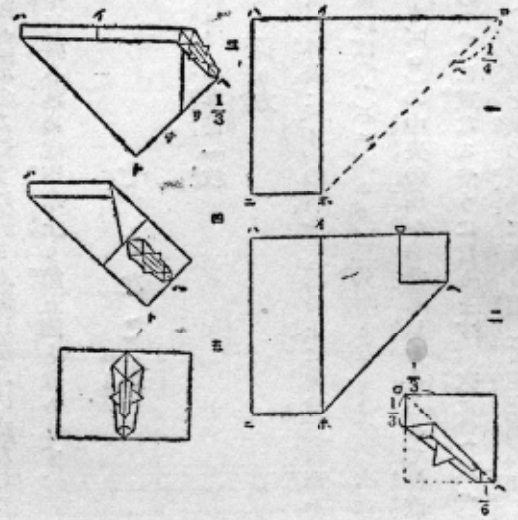
以上出來ましたものを、白酒を入れた瓶の口に出來上り圖のやうに被せて、口元を水引或は紅白の糸か紐でくくります。

次に前に述べた熨斗のつくり方によつて、熨斗をつくり、熨斗の中に適當な花を差し入れ、（枝の先を少し熨斗の紙より長く突き出しておく）鮑結びをした水引をつけます。そして熨斗の下部を丈の四分の一だけ六圖のやうに折り、その折り目に金銀の水引を二つに切つて、それから金三筋をとつて圖のやうにはさみ、中央で、今はさんだ水引のところに幾りの銀一本を後から前に通し、表で眞結びをして、先を巻きます。そして、左右に出てゐる五本の水引も巻きます。

かやうにして、熨斗の下につき出てゐる枝をびんの栓にさして立てます。

六、胡麻鹽包

材料　小奉書又は半紙一枚



紙の折り方

紙を外表に第一圖の如く三角形に折り（ロ）（ホ）の長さの四分の一より折り（ロ）點を（ホ）（ロ）の中央にのせると小さい三角形が出來これを開けば第二圖の如く小さい四角形が出來ます。この四角形で熨斗を作り次に（ニ）（ホ）を右に折り（ハ）（ニ）を（ハ）（イ）（ロ）に合せて折ると第三圖となります。次は（ヘ）（ト）の間を三等分して（チ）の上に熨斗の

中心(ヘ)がのるやうに折り上部は襞斗の丈だけにして殘りは裏に折り倘ほ餘りがあれば中に疊み込めば出來上り第五圖となります。

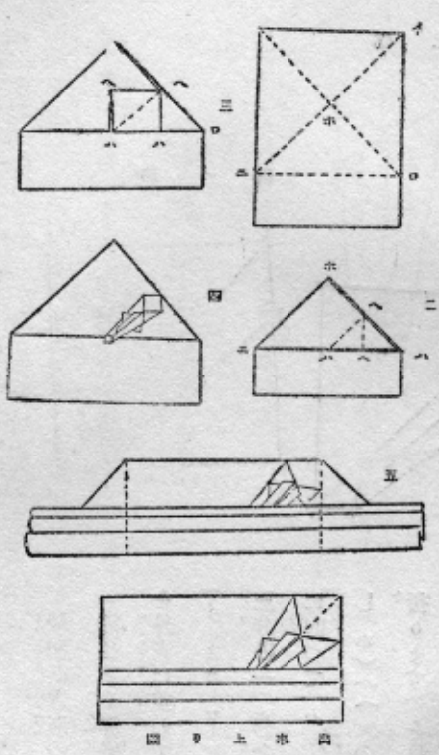
七、きなこ包

材料　小奉書一枚

紙の折り方

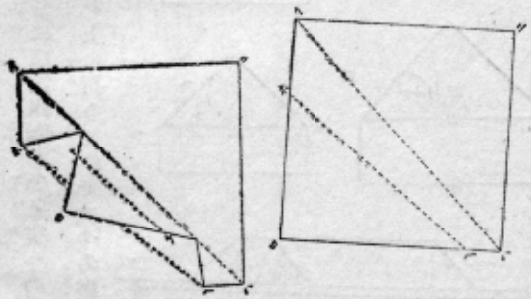
紙を外表に(イ)の角を(ニ)の上に載せ三角形を作り更に(ハ)の角を(ロ)の上に載せて折れば(ハ)(ニ)(ホ)の三角形となります。次に第三圖の如く右の方の一枚(ハ)を取り(ホ)(ロ)の中央の所から裁ち目をそろへて眞直に左へ折り返しますと(ハ)の角の點線の(ハ)に重なるやうになります。次に(ヘ)(ハ)を中心として内側に折り込まれてある(ヘ)の線を其の儘外に折り出して第三圖の如く正四角形としてこれを襞斗に折ります。

襞斗に出來上つた時には第四圖の如く襞斗の頭を定規として上の方の三角を後に折り下の方の殘りの紙を上に折りこれで二つの襞を折ると三段になります。この三段の幅の差は上になる程一分づゝせまくします。次に第五圖の點線で示したやうに一方は襞斗を境に他方は三角形を境目にして兩端を後の方に折ると出來上ります。



八、斗の折り方

第一圖



第二圖



最初正方形の紙を切りこれより一粍せまく赤紙を切つて二枚の紙を外表に重ねて第一圖の如く置き（イ）より（ロ）に向つて（イ）（ロ）の三分の一（ホ）を標し（ハ）より（ロ）に向つて（ハ）（ロ）の六分の一を標し（ホ）（ヘ）の點線の通りに右に折ります。それから今折つた紙を（イ）（ハ）線から左へ折り返しますと第二圖となります。

次に（イ）（ハ）線と（ホ）（ヘ）線との中央に一つの襞を折ります。これと同樣に右を折りますと出來上りの圖の形となります。

この折紙の中央にあわびを細く切つて入れそれから金の水引の撚りを解いて細い金紙で折のしの丈の中央より少し上つた所に帶の如くあてゝ左右の赤にのりで貼りますと出來上ります。

九、花むすびの結方

お中元前後は、よく水引結びの必要がございます。それで、最も簡單で、且つ最も實用的な花むすびの結方を申上げることにいたします。

赤白二尺の水引二本を一本づゝ兩手に持ち、先づ右は赤を上に白を下に、左は白を上に赤を下にして二本並べて、中央の帶の所を左手の人差指と拇指とで持ち、第一圖



の如く、帶から上の部分を、その三分の一の所から向側へ、角立たぬやう丸味をつけて折り曲げる。

次に左側の水引を上に、右の水引を下にして、第二圖の如く十文字に重ね(イ)の端を點線の如く曲げて輪を作り、斜左下(い)の方向に引き下げ、次に(ロ)の端を前と同樣に輪を作りつゝ(ろ)の方向に引き下げます。すると第三圖の樣な形となります。そこで(ハ)の端を又點線の如く(は)の方向に右に折り中央の帶が正しく後になるやうにいたします。

次に第四圖右下の(ニ)の端を、點線の如く(に)の方向に折ります。これも中央の帶が正しく後になるやうに、後側へ折ります。この時、後側では二本の帶が十文字に重なります。次に今の(に)を更に第五圖點線の如く(ニ)の方向に、前側で右下に引き下しま



す。これで略、石疊になりますから、右横にある(は)の端を第五圖別圖の點線の如く下側の赤水引の小さい輪にくゞらせて、左下の方へ抜き出し、第六圖の如く石疊みを作ります。

以上で花結びは出來上ります。そして第六圖に見る如く(ニ)(ハ)の兩端が斜下に出て居りますから之を點線(ニ)(ハ)の如く兩端に引いて品物に結びつけ易いやうに恰好を整へます。裏返して見ますと、第七圖の如く、白の輪が左に、赤の輪が右となつた十文字の花結びとなりますから、品物を包んだ表紙の表にかけて、裏で眞結びに結び、花結び及び裏の眞結びの兩端を恰好よく揃へて切れば出來上ります。

（備考）この結び方は帶の十文字を必ず表に用ゆると限つたものではございませんが、品物にかける時。向つて右に赤が出るのが

法則でございますから、石疊の方を表に用ひたい時は、最初左右に一本づゝ持つ水引の色を、左上に赤、右上に白となるやうに持つて結べばよろしい譯でございます。

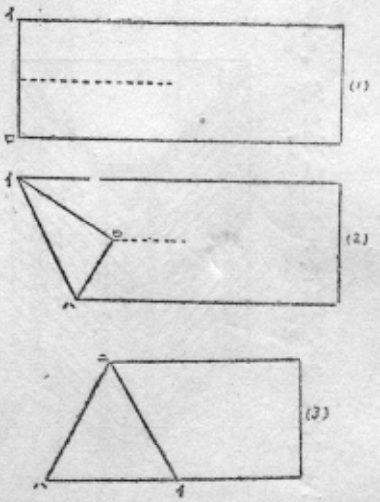
幾何絞

幾何絞といふのは、布を三角、四角などの形に折り重ねて、同じ形の板で兩方から挟んで染める方法で、染め方によつて同じ形でも模樣が幾通りにも或は幾十種類にも染めあがるので、幾何絞だの雪花絞などといつて居ります。茲には正三角と二等邊三角との折り方と染方を申上げます。一般には前のを三角絞といひ、後のを麻の葉絞といつて居ります。

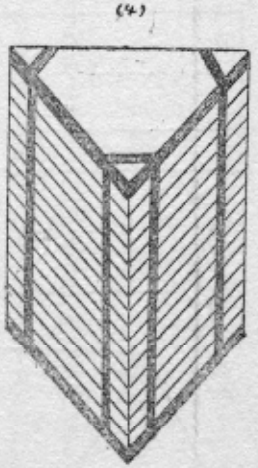
一、三角絞（正三角形）

材料　晒木綿適宜、正三角板二枚（一邊約十糎）糸若干

折方　先づ布を竪に四つに折ります。其の折方は初め二つに折つてよく折目をつけてひろげ、兩方の耳を眞中の折目の所にあてて折り、更に兩方を合はして折ると竪に四つに折れたわけで、布を四つに折る場合には何時でも右の樣に、布の兩耳を中にして折ります。



次に其の布を横にして、左の方を二十糎又半分に折つて(1)圖の樣に折り目をつけます。次に(2)圖の樣にイの角を中心に下の布を折つてロの角が眞中の折目に當る樣に折ります。次に(2)圖のハロの邊に添ふて折りますと(3)圖の樣な三角が出來ます。これが正三角形でこの折り方は布巾の



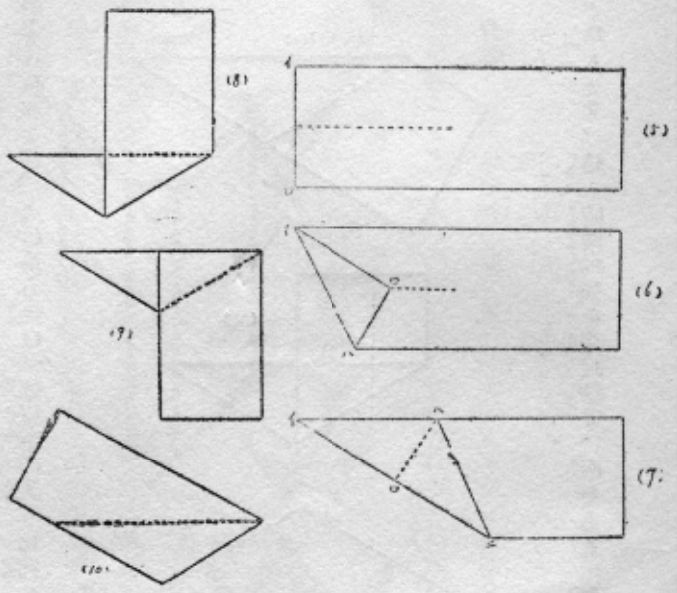
大小に抱らず同樣であります。次にこの出來た三角を基として、この三角の通りに外例へと折り重ねて行きます。殘りのない樣に全部を折り疊みましたら、三角の板を兩方から挾んで、三方の角を糸で五六回固く卷いて歩めて置きます。締め方は出來るだけ固く締めて置きます。

二、麻の葉絞（二等邊三角形）

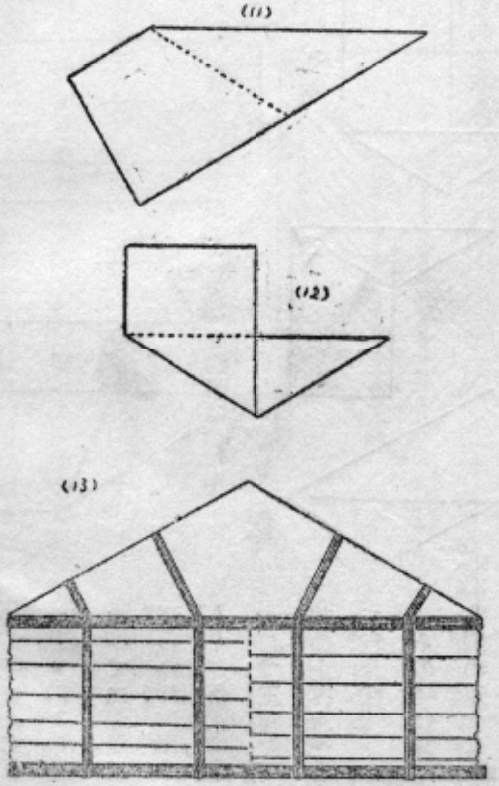
材料　晒木綿適宜、麻の葉板二枚（一邊約十五糎、他邊約十糎）糸若干

折方　先づ布を竪に四つに折ります、この折方は前に折つた通りですから省きますそれを三角の時と同樣にして(5)圖の樣に折り、更に(6)圖の所まで折ります。次にイの角を中心にしてイロの邊に添ふて折りますと、ハの角が上に行つて、イロの邊が二までのびて二等邊三角即ち麻の葉形の一片が出來たわけであります。今度は布をひつくり返へして三角を下に土臺にして其の上へ上へと布を折り重ねて行きます。

その變化は(8)圖の形となり(9)圖の形となり、次に(10)圖の形に折り、次に(11)圖から(12)圖



の形に折ります。これから先は(9)圖以下の通りに同じ折方で、只向が異つたのみで順次の布のある限り、交互に折り重ねて行きます。布の殘りがない樣に折り疊みましたら、(13)圖に示す樣に糸で固く結りつけます。結る時兩外側を先に結り、中をあとで結つた方が便利です。



三、實染

染方、三角でも麻の葉でも、乾いたまゝを染液につけます。其の浸け方の原理を二三說明致します。先づ三角の角だけを入れると(14)圖に、一邊を入れる15)圖に角々三ケ所を浸すと16)圖に、三邊を浸すと(17)圖の樣に染液が浸み込みます。



これをいろ〳〵應用工夫して染めると幾十種もの模樣が染まります。麻の葉の方も同じ樣な理ですから省きます。

染液　直接染料だと簡單に只煮ればよいのですが、ウシオ染料で染めます。先づ次の順序で染液を作ります。

一、熱湯に苛性曹達を指先につけてヌル〳〵過ぎる程ときます。

二、ウシオ染料（三角染二反で三匁位を酒かアルコールでねつたものを前の液に入れ。

三、ハイドロサルハイトを少しづゝ入れて液を靜かに混せ染液が黄色になつて、細色の泡が出來るまで入れます。

染液が出來ましたら五分乃至十分間位染めて、暫く置いて黄色が青黒色になつてからよく水で洗ひ、薄い酸液に通して今一度水洗ひして干せば、それで染め上りであります。

四、寫し染

寫し染といふのは、色紙を布の上にあて火熨斗をかけて染みつかす方法で、色紙は染料に糊を混せて紙に塗りつけ作ればよいのですが、コンバルペーパーといつて特に其のために作つて賣り出されて居りますから、このコンバルペーパーを利用するのが尤も便利であります。

準備　このコンバルペーパーといふ色紙には赤、時、橙、えんじ、黄、綠、オリーブ、青、藍、紫、茶、焦茶、海老茶、鼠、黒、白等各色ありますから、好みの色紙を樣々の模樣の形に切ります。

一色とは限らず幾色でも取り合はすことが出來ます。それは只色をいろ〳〵ならべるといふばかりでなく、重ね合はしてよいのでありますから、工夫によつては隨分面白いものを作ることが出來ます。

染方　コンバルペーパーは絹、木綿、麻、人絹等に染めつきます。尤も絹は其のまゝで染めつきますが、木綿麻類は後で固着液を通して置かねばなりません。

先づ平板の上に新聞紙二三枚敷き、その上に布地を一度水に浸して固く絞るか、或は水霧を平均に吹いたものを、よく皺を伸ばしてひろげます。次に色紙の切形を適當

の位置に色の配合などを考へてよく貼りつけます。次に布を靜かに裏返しにし新聞紙をあてて熱い鏝をよくかけます。この時鏝の燒方が弱かつたり掛け方が足りなかつたりすると、よく染みつきませんから注意せねばなりません。次に澤山の水の中で手早く洗ひまして、新聞紙に挾んで水氣をよく取つて乾かします、乾けばそれで完全に出來上つたのであります。

絹類は以上でよいのですが、木綿麻類は前の樣にして鏝をかけたら更に固着液を通さねばなりません。それはコンバル用固着液を五十倍か百倍位に水に薄めた中に五分間程浸して水洗ひし、新聞紙に挾んで水氣をよく取つて乾かします。

注意　鏝を掛ける時は布に濕氣のある內にかけます。若し乾きましたら濡れた布で裏から濕めすか、催かに霧を吹いてから鏝を掛けます。

用途はクッション、テーブルカケ、小供服、風呂敷、カバー類に應用して面白いと思ひますが、圖案と配色とを工夫考案して用ひますと利用の途は中々大いものと思ひます。

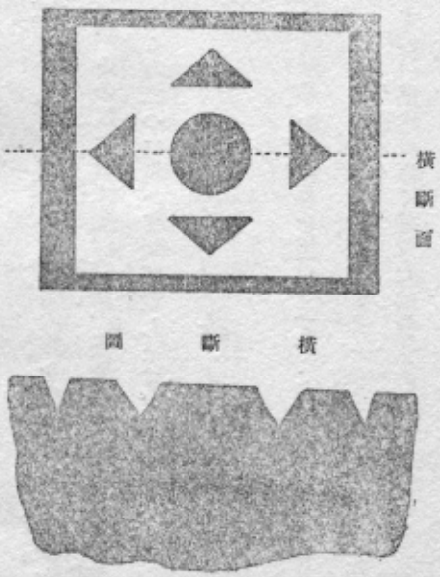
押版染

押版染といふのは、樣々の模樣の版を作りそれに染液をつけて布の上に押して染める方法で、その版には木版、芋版、蓮版などあります。簡單で面白いのは芋版と蓮版ですからこの二つに就いて說明致します。

一、芋版染

芋版は靈藥芋か馬鈴薯を用ひます。これを適當の形や大さに切り、それに模樣を描きます。描くには鉛筆で殊に赤鉛筆が便利であります。模樣を描きましたら小刀で彫るのですが、圖案は極く簡單な略畫式のものを撰んで、彫つたくぼみは圖に示す樣に谷になる樣に彫つて置きます。ほれましたらこれに染汁をつけて布に押します。

押し方には變りはありませんが、下に不用の布を二枚位重ねて置き、その上に染布をひろげて平均に押さねばなりません。一つの版があれば、それを幾つも連續させて押したり、又適當の間をあけて飛模様にしたり、或は一つの版でいろ〳〵の色に用ひることも出來ます。注意することは染汁を滲じませぬことですが、これは後に染液のところでお話し致します。



二、連版染

蓮版染は蓮根を切つて用ひます。蓮根は特有の穴をもつて居りますから、これを利用して或は縦に或は横に切ります、又切方も眞直に切るか斜に切るか、斜に切るにもその斜加減によつて、様々の形を出すことが出來ます。これに染汁をつけて布に押すので、押し方には芋版と變りはなく、連續模様に飛模様に好み好みに押します。

染汁　染料は木綿類なら直接染料、絹毛類なら酸性染料か鹽基性染料を用ひます。染料を熱湯で溶いてこれに布海苔の汁を少し加へて、染汁の滲じみを止めて置きます色の程度は好き〳〵であつて若し染液を薄める様の場合は、なるべく布海苔の汁で薄めます。

以上の染料を使つた時は、版を押し染汁が乾いてから蒸熱して置かねばなりません蒸し方は新聞紙をあてて小さく折り、御飯蒸の中に入れて沸騰してから十五分間位蒸

して、水洗ひして乾かします。

此頃蒸熱不用の染料としてアルスといふ染料が賣出されて居ります。此染料は蒸す必要がなく、版につけて布に押せばそれで完全に染みつくといふのですから、斯うした染物には至極便利だと思ひます。

尙此押版染は芋や蓮に限つたことはありません。外の野菜類其の他のもいろ〳〵と應用が出來ます。

霧吹染

霧吹染といふのは、染液を霧吹器に入れ布の上に吹きつけて染める方法で、これも又簡單で面白い染色の一つであります。

材料　キヤラコ卓子掛大、霧吹器、木の葉又は型紙

準備　先づ用布を平たい所へひろげ、若し止められれば四角を畫鋲等でとめて置き、

樣々の木の葉を集めてこれを布の四邊へ、適當に格好よく配します。この葉も霧吹の時に飛ぶといけませんから、鋲か針で止めるか或は糊ではりつけて置きます。

若し木の葉に適當のものがなければ、厚紙でいろ〳〵の型を切つて、それを鋲か糊かで止めて置きます。又切抜いた型紙を使つて、別に糯粉かメリケン粉の樣なものを少し固い位に水でねつた糊を作り、この糊を布に型置きして置く方法もあります。然し天然の木の葉を使ふのが一番簡單であります。

霧吹、前の準備が出來ましたら染料を霧吹します。染料は用布がキヤラコですから直接染料を用ひるのですが、直接染料は押版染の時に說明しました通り、後で蒸熱せねばならぬ手數があり、又色相も力も餘りよい方でありませんから、玆ではチオ染料といふのを使ひます。

チオ染料といふのは、既に藥品が調合されて居て、其のまゝ水にうすめて用ひればよい樣になつて居ります。先づこの染料の原液を五倍か七倍位に水で薄めたものを霧

吹器に入れて布の上に吹きつけます。霧吹の吹方は餘程注意しませんと、吹き方が弱いと大きな霧が飛んだり、水玉がこぼれたりして汚なくなります。尙このチオ染料は僅かに色がついて居て、殆ど分かりませんから霧吹の時よく加減をしませんと、濃くなつたり淡くなつたり斑染になります。

霧吹が出來ましたらなるべく天日に晒して乾燥させます。日蔭で干すなら二日位置いて充分に乾かします。乾きましたら温湯に硫酸か醋酸を少し入れて、なめてすつぱい位の液を作り、この中に平均に手早く浸しますと見る内に發色致します。若し乾き方が足りないとよく發色致しません。酸液には二三分間浸せばよいのですが、酸液が冷めたければ少し永く浸して置きます。

次によく水洗ひして石鹸液で煮るか、石鹸をつけてよく揉み洗ひ、最後によく水洗ひして干します。

このチオ染料は原料はインジゴゾールといふ染料で、これを種々の藥品を調合したもので、目下青色に紫色との二色が賣出されて居ります。

茲には假に卓子掛を染めましたが、其の他クッション、座布團カバー、壁掛、浴衣等に應用して、中々趣味のあるものが出來ます。

蔦纈染（ローケツ染）

蔦纈染は蠟纈染ともいつて、蠟質を防染に使つて染める方法で、隨分古からある染方でいろ〳〵の仕方もありますが、極く簡單なローケツ染を說明致します。

先づ蔦纈染の大體の順序を申しますと、生地の用意、圖案下描き、蠟描き、模様着色、模様伏蠟、地染め、蠟落し、色蒸しといふ工程になりますが、右は數色染め仕方で一色染ならば、右の内で模様着色と模様伏蠟とは省けることになります。

生地　蠟纈染用の生地としては、麻、天竺木綿、キャラコ、羽二重、錦紗、富士絹等が適して居ります。モス、セル等の毛羽のあるものはよくありません。地色は白な

らば結構ですが、薄色ならば大底の色は差支へありません。ですから古物を色揚などして用ひ立派なものが出來ます。用途も大きいものでは壁掛、卓子掛、帶、錺掛等に向き、小さいものでは名刺入、財布、手提袋等に用ひて非常に趣味深いものが出來ます。

圖案　圖案は其の人の好みと應用とによつて、隨分面白いものが出來ますが、密畫よりも略畫式のものの方が適して居ります。一色染と多色染とでは圖案も異つて來ます。一色染では圖案を只生地の色で殘すに過ぎませんが、多色染は自由の色を使ふ事が出來ますから、可成復雜な模樣を染め出すことが出來ます。然いづれにしても餘り小かい模樣や線は適しません。

蠟描　蠟は木蠟でも白蠟でも又蠟燭の屑で結構です。專門家は蠟に松脂を加へて熔かしますが、一般素人には蠟だけで差支へありません。蠟は最初は火にかけて熔かしますが、熔けたら湯煮にして置きます。其の熔け工合は寒暑によつて火を加減して熔けた蠟が布の裏までも滲み出る位の熔け加減を要します。筆は極く細筆を用せませんと、蠟をつけると太くなつて細い線を描くことが出來ません。

同一圖案でも一色染と多色染とは蠟描きをかへます。左圖(1)は一色染の場合の蠟描きで(2)圖は多色染の場合であります尤も(2)圖の通りに蠟描きしたものを單に一色染にしても差支へはありません。

着色　多色染の場合は是非(2)圖

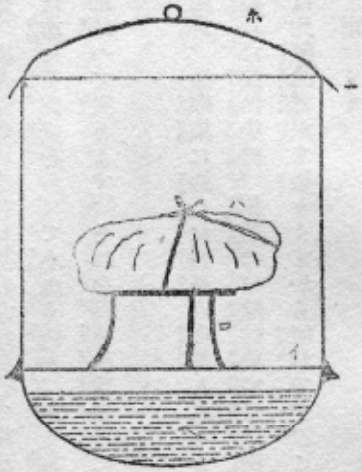


の様に蠟で線描きをして、線描きの内を着色します。染料のことは後にありますが、染液を筆又は小刷毛につけて、染液が蠟の線より外へ滲み出ない様に、色の程度は平均でもよく、濃淡をつけてもよく、ボカシに着色することも出來ます。

伏蠟　着色が濟みましたらよく乾かしてから、着色した上に蠟を塗りつけます。前の蠟描きと變りはありません。よく蠟が布の裏まで滲みる様にして、若裏まで滲みなければ裏からも表と同じ様に蠟を塗つて置きます。

地染　一色染のものは蠟描きが濟んでから多色染のものは伏蠟が濟んでから地染めをします。地染めの仕方は引染といつて染液を刷毛につけて、布の上に引き染めてもよいのですが、大きい物は引染では斑染が出來易いものですから浸染にします。浸染にするには是非蠟が布の裏まで滲みてるか、兩面を蠟描きして置かねばなりません。引染でも浸染でも染液は冷液でなければいけません。熱いと蠟がとけますから呉々注意を要します。適當の色に染まりましたら、ザッと水洗ひして干します。

蠟落　乾きましたら蠟落しをします、蠟を落すに染料が堅牢なものなら、石鹸液か曹達液で煮れば簡單にとれますが、普通の染料では煮られません。それで上下に新聞紙をあてて熱いアイロンを掛けて取ります。新聞紙はとりかへ〳〵幾度も繰り返します、これで大底はとれますが、まだ幾分蠟が殘る様なら揮發油かベンジンで洗へばと



蒸飯器の蒸方圖
イ、鼠力の籠
ロ、五德
ハ、新聞紙包
ニ、麻布
ホ、蓋
ヘ、湯

れます。

色蒸　染料によつては蒸熱の必要のない、冷液で染ます染料もありますが、直接、酸性、鹽基性等の染料は是非最後蒸して染着を充分にして置かねばなりません。蒸し方は布に新聞紙をあてて小さく折り、布と布との間には必ず新聞紙を挟んで輕く十文字に結つて置きます。それを御飯蒸器の中に入れ、湯が沸騰してから二十分位蒸します。

染料、蠟纈染に適した特殊の染料もありますが取扱が困難ですから、一般には木綿類には直接染料、絹類には酸性染料又は鹽基性染料を用ひます。絹類には鹽基性染料は比較的低温で染りますから便利です。これ等の染料はそれ〴〵助劑を加へて溶かして用ひます。

霧吹染に用つたチオ染料は、色の種類がまだ青と紫しかないので不便ですが、冷液で染まる點と、發色の際酸の熱液を通せば同時に蠟落しも出來ますから、非常に好都合であります。このチオ染料を地染に使つて、摸様着色を鹽基性染料が直接染料で染めることも出來ます。

金銀捺染

金銀捺染といひますが染めるのではなくて金銀粉を糊に混せて捺りつける方法であります。

金銀、金銀は貴重なものには純金銀粉を用ひますが甚だ高價ですから、普通には擬金銀粉を用ひます。金粉といふのは眞鍮の粉末で、銀粉といふのはアルミニユムの粉末で、何所の藥店でも賣つて居て安價なものであります。細かい粉末で殊に銀粉は僅かの風にも飛び易いものですから、靜かに取扱はねばなりません。尚金銀に限らず青茶、牡丹等もあります。

糊劑　糊には水で洗つても揮發油で洗つても落ちないものもあり、又揮發油では落

妻大圖

ちるが水洗ひでは落ちないものもあり、又水洗ひだけで落ちるものもあります。水洗ひしても落ちない様な糊は困難ですから、強く水洗ひすればとれるが簡單の方法を申します。

文具店で賣つて居るヤマト糊（便利糊）を買つて來て、これを三寸角位のゼラチンを一合の湯に溶いたものでねつて軟かにし、其の糊に金粉又は銀粉を混せます。混せる分量は糊の半量位の金銀粉を混せますが、實際には混せたものを紙に塗つて見てこれが金紙又は銀紙に見える程度に混せます。

型紙　捺染するには型紙が入ります。型紙は自分で切つてもよく又賣つても居りますが其の型紙は刺繍などに用ひる切抜いた型紙でなければ面白くありません。此型紙を使用する前に豫時水に浸し、よく水分が紙に浸み込んでから、兩面の水氣をよく拭きとつて使ひます。

先づ新聞紙を敷き、其の上に布をひろげ適當の位置に前の型紙をあて、金銀の糊をヘラか指先につけて型紙の上から輕く捺ります。捺る時に強くしたり糊を澤山つけたり、又同じ所を何回も何回も捺つたりしますと、糊が型紙の裏へ廻つて汚點が出來て、汚ないものが出來上りますから、靜かに輕く少しづゝ捺りつけます。

仕上　糊を捺染して乾きましたら、湯伸しかアイロンを掛けて仕上げれば出來上りであります。強く水で揉み洗へばとれますが、汗などでとれる様なことはなく、方法も至極簡單ですから、新らしい物よりも古物殊に半襟の廢物を濃く色揚げして、この金銀捺染をしますと、殊に立派な半襟が出來ます。

絞染

本項の最初に、器具で引締める幾何絞を説明致しましたが、最後に糸で引締める縫絞の仕方をお話致します。

用布　茲には風呂敷を染めるとして、モスリン地風呂敷大のものを用意致します。

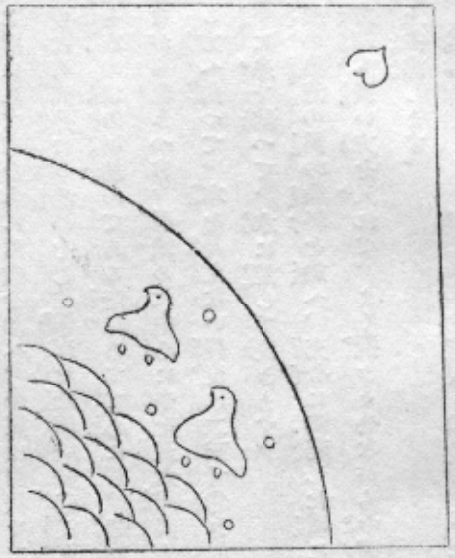
下繪　波に千鳥の模様を置きます。型紙か圖案を使つて青花を水で溶いた汁で描きます。

絞方　生地がモスリンですから、カタン糸の三十番を二重にして縫ひます。

縫方は先づ千鳥を一一一一の様なすくひ縫ひ、糸を表に澤山出してぐるつと一まわり縫つてそのまゝ糸を少し殘して切ります。千鳥の目は一分程針で引つ掛け、それを糸で三四回巻いて止めて置きます。次にハート、丸い水玉とは千鳥と同じ様に縫つて引締め、その糸で布が見えない様に巻き包んで止めます。次に波の線を境に布を二重に折つて、その山を摘んで縫代五厘位針の目一分位にぶつ〳〵と縫つて、固く〳〵引締めて止めます。次に境の線を一重で普通の針の目に縫つて引締めて糸を止めて置きます。

準備　絞が出來ましたら、絹類なら水に浸して其のまゝすぐ染めますが、モス、セルの毛類は上等の石鹸の薄い液で二十分位煮て置かないとよく染まりません。それで先づ水に浸して青花を洗ひ落し、石鹸液で煮てよく水洗ひしてから染めます。

染方　染料はモスリンですから酸性染料を用ひます。染鍋に湯を用意しそれに別の茶碗等に熱湯でといた水色の染料を加へ、染液をよく攪き混せながら布を入れ、箸でよく混せて斑染にならぬ様にし、四五分たつてから布を取り出し、醋酸を少し加へて布を入れ四五分間煮ましたら、取り出して冷ましザッと水洗ひして、すぐ千鳥を巻きあげます。糸で布が見えない様に巻きながら、千鳥の目玉を糸と糸の間



圖案と其絞方

から出す様にして置きます。次に前の殘りの染液に中色程度の暗綠色の染液を加へ前と同じ様にして布を入れ醋酸を加へ、今度は前後で二十分位煮て置きます、取り出して冷めたら充分に水洗ひをし、濡れた新聞紙で直徑五分、長さ五寸位の棒を作り、この棒を布の境の引締めてある所にあてて心にし、縫締めた所を中心に布をよく兩方に分けながら巻きつけ、引締めた中心に糸を五六回固く巻き、更にそれから千鳥の模様のある方へ向つて、布を見えない程度に二三寸巻き、其の糸の上を新聞紙に包み其の上を更に糸で結つて、水に浸して置きます。

前の殘の染液の黒の染料を加へ、充分に沸騰した頃に、布の巻いた方を手に持つて反對の方即ち廣い方を入れて、よく攪きませながら中頃に醋酸を少し加へて、前後二十分以上煮沸します。

仕上　染上りましたら冷めてから充分に水洗ひをし風通しのよい日蔭に干して、乾いてから絞りを解きます。最後に輕くアイロンを掛けるか、湯伸をして仕上げを致します。

注意　絞りは出來るだけ強く締めて置くこと、染める前には二度目でも三度目でも必ず水に浸すこと、染色の際は沸騰させて充分に熱を與へておくこと、最後の水洗ひは充分にすること、必ず日蔭で干すこと、絞りは布が乾いてから解くこと等は、忘れてならぬ心得であります。

茲には極く地味な色を擇びましたが、色の配合は各自の好みでであります。

初歩の手藝　終

昭和四年八月十五日印刷
昭和四年八月二十日發行

初歩の手藝—奥附

定價金壹圓貳拾錢

不許複製

著者　大妻コタカ

發行兼印刷者　東京市神田區今川小路二丁目十四番地　高倉嘉夫

印刷所　東京市神田區今川小路二丁目十四番地　忠誠堂印刷所

發行所　東京市神田區今川小路二丁目十四番地　忠誠堂
電話九段一九五八番
振替東京二〇四三一番

棚橋絢子刀自著

女らしく

菊半截判裝幀美
函入三百頁
定價一圓二十錢
送費八錢

「らしく」「ふらず」とは、實に修養の合鍵、男の男らしからざる、女の女らしからざる、共に唾棄すべし、棚橋先生、近時斯く女の女らしからざる者多きを憂ひ、共圓滿なる學と識と德とを傾けて、本書を著さる、言々肯綮、さながら慈母の愛娘を敎育するの概あり天下の女學生、良妻賢母諸君、此一本を座有の寶典として、自己の修養訓たらしめ、併せて子女敎養の好指針となさば、得る所實に計るべからざるものあらん。

目　要

精神の持ち方　新婦人の修養　女の世に出でし譯
儒道の敎育　孟子の言に鑑みよ　婦人の修養書
味のある敎訓　動中に靜なれ　自然を待つ
姑と嫁の和合　一家圓滿の法　家庭と品性
別居か同居か　勤勞の興味　家庭の禁物
家督相續　婦人と政治　其他數十章

文部省通俗圖書認定

櫻井女學長
櫻井ちか子先生著

三食五日朝晩曾のお惣菜

◇好評噴々無限の需要◇

四六判三百頁
洋裝美本函入
定價一圓二十錢
送料十錢

卅六版

家庭園藥の源泉

なくてならぬ主婦の相談相手は是れ！

平常國分世間した主婦方でも頭を惱ますものは毎日のお惣菜である、殊に現代社會の文化に伴ひ都會生、費實、經濟方面にも大に注意せねばならぬことになつて來たので主婦方の苦心は到底側の想像を許さぬものが多い此の缺點を補はんが爲めに出たのが本書である、即ち、この書は著者が一般食料品に缺き最新原理を採用し普通の材料を以て經濟的に衛生的に、そして滋養に富み且變化多き料理法を研究工夫されたものである、尙家庭向菓子類の製法から家庭應急手當等も附錄に加へてあれば信濃に採用して獨立を賜はし又種々の重寶も得らるゝ故に一冊本書を備へ付けた家庭の主婦方は副食物に心を勞する必要なく一年三百六十五日毎日朝晩夕の三食目新らしいお惣菜を食膳に上せることが出來るのである有ゆる階級を通じて家庭上實際に役立つことに於ては恐らく此書以上のものは他に求め難いと云つても決して過言では無い家庭を洋々春の如き快樂を以て滿さんと思はるゝ方は一本を備へて其の需實を味はれんことを切におすゝめする。

忠誠堂編輯部編

日常生活 家庭百科精典

四六判九ポイント組
振假名付九百餘頁
クロース背革
定價二圓五十錢
送料十六錢

本書は家庭の經營者が日常是非とも心得て置かなければならぬ家庭必須の新知識一切を網羅し特に解說に便ならしむるために多數の挿繪と說明圖等を挿入して最も懇切叮嚀に何人にも極くわかり易く各項すべて讀者から見ると全く實際に手を取つて敎えて貰ふの感があるやうに編輯したものであります、隨つて本書一冊があれば家庭萬端の要求が立どころに理解を得られ應用が出來て家庭生活の完全が期されることになります。

家庭の平和と幸福のためにこの家庭の羅針盤、日常生活の敎科書とも謂ふべき本書の御一讀を切に御すゝめします。

